

シズちゃんが酒代のために冒険者になる話

ファジー・ネーブル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シズちゃんが酒代のために冒険者になる話です。

予想以上の高評価を貰えたので、第一話を大幅に書き直して連載化しました。

ごめんなさい。

諸事情で完結できなくなりました。

目次

シズちゃんがももふにしたことを男にする話
106

シズちゃんが酒代のために冒険者になる

話 1

シズちゃんが飲酒と賭博を覚える話

16

シズちゃんが悪堕ちしそうな話 1

シズちゃんが血に塗れる話 50

シズちゃんが馬車馬を載せた馬車を牽く

話 65

シズちゃんが周りにドン引きされる話

82

シズちゃんがももふをももふする話

95

シズちゃん酒代のために冒険者になる話

シーゼットニイチニハチ デルタ
C Z 2 1 2 8 · Δ。通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女は何の因果か生まれ故郷にして死に場所であるナザリック地下大墳墓から未知の世界へ転移してしまった。ここはユグドラシルなのか、「りある」なのか、全くの異世界なのか、それすら分からなかったが、彼女が行うべき事は変わらない。ナザリックに帰還する。それこそが最優先事項にして最終目的だ。

そんな彼女は今、酒代のために冒険者になろうとしていた。

ことの始まりは転移直後まで遡る。

彼女は不幸中の幸いというべきか、エ・ランテルという都市の近くに転移した。自動人形には飲食ペナルティ、それも人造人間ホームンクスよりも厳しい『高カロリーを摂取しなければならぬが、飲料しか摂取できない』というペナルティがある。もしも誰もいない草原のど真ん中にも転移していたら、人里に辿り着く前に餓死していただろう。

(……………状況は分からない。でも、このままだと餓死する。)

彼女は自動人形らしく、冷静に現状を分析する。間の悪いことに、彼女が転移したのは丁度食事を摂取する寸前だった。

ナザリックから放り出された以上、このままでは食事も取れずに死ぬ。彼女は死を恐れていない。だが、至高の御方々の役に立てないことを何よりも恐れている。至高の御方々の役に立たない形で死ぬことだけは認められない。

(……………だから、生き延びて、帰らないと)

そんな彼女は自分が摂取できる食料を求めて、エ・ランテルに入ることにした。そしてカルマ値がプラスに設定された存在らしく、検問所を通ろうとする人々の列に真面目に並んだ。

このとき前に並んでいた四人組が、ことの発端となる。

彼らはいわゆる冒険者というもので、いつも通り野伏^{レンジャー}、戦士^{ファイター}、魔術師^{ウイザード}、森祭司^{ドルイド}という形で一列に並んでいた。だが、最も感覚が優れた野伏^{レンジャー}が、先頭だったにもかかわらず最初に後ろに並んだ存在に気付いた。

(金属鎧の音?にしては足音が小さい、というか歩幅が狭い)

彼の常識では金属鎧というのは体格にも体力にも優れ、なおかつ金銭的に余裕がある戦士^{ファイター}か神官^{クレリック}が装備するものだ。ではこの音は何だろうかと思つて彼は振り返つた。

そこには神の芸術品があつた。

この世のいかなる人形より整つた顔立ち、冷たい輝きが宿つた翠玉^{エメラルド}のような瞳、目が覚めるような赤^{ストロベリーレッド}の長く豊かな髪、神に設計^{デザイン}されたと思えない均整の取れた肢

体。そして分厚い装甲板を散りばめ、まだら緑のホワイトブリムに同色のマフラーと手袋を備えた奇抜な、しかし彼女の美しさを一切損なわずに引き立てる上質なメイド服。左目を隠すアイパッチすら魅力的だ。

黄金のラナーと名高き第三王女と並ぶであろう美しさがそこにあった。

彼は列から抜け出して、道化のような仕草で彼女の前に跪きながら口上を述べた。

「初めまして美しきお嬢さん！俺の名はルクルット・ボルブ！あなたのお名前を教えてくださいませんか!？」

「……………うわぁ」

「ド、ドン引きありますがとうございますー！」

彼女は思わずこの上なくダサイものを見たかのような声を出してしまった。しかし彼は随分と心が強かつたらしく、ドン引きされていると理解した上で感謝してのけた。彼女はその心の強さを少しでも評価しようと思った。なお、彼の仲間と思しき三人は苦笑いをしていた。

「それで、お名前を教えてくださいただけたら嬉しいのですが」

「……………」

シズは悩んでいた。彼女は『ナザリックの全てのギミック及び解除方法を熟知している』と『設定』されている。ゆえに情報漏洩の恐ろしさというものにはプレアデスで最

も敏感だった。ここがどこか分からない以上、自身を含めたナザリツクの情報をどこまで開示して良いのか、慎重な判断が必要だ。ナザリツクの情報を抜こうとする敵対者の意思でここに転移させられた可能性もゼロではないのだから。

「あ、あの？」

「……………シズ」

結局、彼女は自分をピンポイントで転移させた者ならば知っていて当然であろう情報から開示していくことに決めた。自分の名前が広まれば、もしかしたらナザリツクが自分を見つけてくれるかもしれないという期待もある。

「シズさん！いやシズちゃんと呼びせていただきたい！惚れました！一目惚れです！愛しています！どうか俺と付き合ってください！」

「……………嫌」

「い、嫌って…………」

ルクルツトはシズの取り付く島もない反応にガックリと肩を落とす。ドン引きされた上で彼女の極寒の視線に耐えながらアプローチしたことは褒められてしかるべきだろう。

彼女は自分が至高の御方々に与えられた美しさに、彼が一目惚れをしたということも理解した。しかし、この身は至高の御方々のものだ。くれてやる訳にはいかない。

「ではせめてお友達から！」

「こらルクルツトいい加減にしないか！すみません、うちのチームメンバーが……」

「……………いいい」

ダサいとは思っても害を受けたとは思っていないシズは鷹揚に答えた。しかし少し気になった言葉を聞き返す。

「……………チーム？」

「はい、冒険者チーム『漆黒の剣』です。私はリーダーで戦士のペテル・モーク。先ほど名乗ったのが」

「野伏のルクルツト・ボルブだ。よろしく！で、こっちの小柄なのと大柄なのが」

「魔術師のニニヤです」

「森祭司のダイン・ウツドワンダーである！」

「以上、四人からなる銀級冒険者チームです」

「……………冒険者って何？」

「えっ」

「……………えっ」

どうやらこの地では知っていないとおかしい常識だったようだ。常識を知らずに大失敗するところだったと、シズは聞き返した判断を自賛するのだった。

「えっと、冒険者というのは隊商の護衛やモンスター退治などによって収入を得る仕事です。聞いたことはありませんか？」

「……………ない。銀^{シルバー}級というのは？」

「冒険者は実績によってランク分けされているんです。下から順に銅^{カッパー}級、鉄^{アイアン}級、銀^{シルバー}級、金^{ゴールド}級、白金^{プラチナ}級、ミスリル級、オリハルコン級、アダマンタイト級です。私達は下から三番目ですね」

そう言いながらペテルは首にかけた銀のプレートを持ち上げて見せた。

「……………アダマンタイトより上は？」

「ありません。アダマンタイトが最も硬い金属ですから」

「……………そう。ありがとう」

「いえ、お役に立てたなら幸いです」

シズは至高の御方々が話していたことを思い出していた。たしか、『しよしんしゃえりあ』なる場所では敵が弱い代わりに程度の低い金属しか採掘できないという話だった。ではアダマンタイトが最も硬いというここはユグドラシルの『しよしんしゃえりあ』なのだろうかと彼女は考えた。

話が一段落したと見たペテルは、シズに誰もが疑問に思うであろうことを聞いた。

「ところで、シズさんは変わった装備をされていますがメイド、なんでしょうか？」

「……………うん」

どうやらシズのプレアデスとしての装備が気になっていたらしい。シズ・デルタのことも知っているものならば当然プレアデスことも知っているはずなので、シズは教えても問題ないと考えて肯定した。

すると、その肯定を聞いたニニヤがためらいがちに問いかけてくる。

「あの、ツアレニーニヤという女性を知りませんか？あちこちの屋敷を盪回しにされているらしいのですが」

「……………知らない」

「そうですか……………」

それを聞いたニニヤは悲痛な表情を見せる。それを見たシズは創造主に設定された善性を刺激されるが、できることは大してないと思いなおす。

「……………見つけたら、教える。……頑張れ」

「ありがとうございます」

そう言つてニニヤは少しだけ笑う。そんな場の空気を変えるようにペテルがシズに問う。

「そういえば、変わったメイド服をお召しになられていますか、シズさんはどこからいらしたのですか？」

「……………ナザリック」

「ナザリック……………？聞いたことが無い地名ですね…………。遠い、にしては荷物をもたれていませんし…………」

「……………転移で飛ばされた」

「転移?！」

「驚きである!」

魔法詠唱者であるニニヤとダインが驚いて大きな声を上げ、魔法にそこまで詳しくないペテルとルクルットが二人に問いかける。

「どうしてそんなに驚いてるんだ?」

「転移ってたしか、第三位階の魔法だろ? すごいけどそこまで驚くことか?」

「第三位階の転移は次元ディメンショナル・ムーブの移動と言ってあまり遠くには移動できないんです。せいぜい間合いを詰めたり逃げ出したりするのに使う程度です。地名を聞いたことが無いほど遠くからの長距離転移なんて、第五位階以上ですよ!」

「第五位階といえばアダマンタイト級冒険者、英雄の領域である! シズ殿は一体誰に飛ばされたのであるか?」

「……………分からない。気付いたらこの近くにいた」

「着の身着のままってことか、それで荷物をもつてなかったんだな」

「……………うん」

敵密にはアイテムボックスにいくつかの装備やアイテムなどの荷物は入っているが、このあたりではアイテムボックスを使わないか、使えないのが当たり前のようなのでシズは話をあわせる。合点が行った様子のペテルがこれからどうするのか問う。

「ということは、シズさんはナザリックに帰られることが目的なのですね?」

「……………うん」

「しっかし聞いたことも無いほど遠くから転移なんて、どうやって帰ればいいんだ?」

「ルクルット!」

「あつ、ごめんシズちゃん!不安にさせるつもりじゃなかったんだ!」

翠玉エメラルドの瞳から発せられる極寒の視線を受けながら頭を下げ謝罪するルクルットに

シズは当然の答えを言う。

「……………探す。地の果てまで」

「いや、シズちゃん、地の果てまでって……」

「……………例え一生かかろうと探す。世界全て」

彼らは最初、小さな女の子がムキになっているか、現実逃避をしているのだと思っていた。だが、シズの全く揺るがない目を見て認識を改めた。この子は本気だ、と。

ニニヤにはそこままでして帰りたい奉公先があるとは信じられなかった。貴族の豚ど

もは自分たちのことを家畜だとしか思っていない。どこの国でも同じはずだ。

「シズさん、あなたは一体……」

「……………私は至高の御方々に仕える戦闘メイド『プレアデス』が一人、シズ・デルタ」至高の御方々。そんな敬称をもつ存在など彼らは知らない。このリ・エステイーゼ王国の王族どころか、隣のバハルス帝国で絶大な権力を誇る皇帝すらそんな呼ばれ方ではない。そしてシズのような美貌と忠誠心の持ち主を護衛として複数抱える存在など、想像もできない。

「……………順番、来た」

見ると前に並んでいた人の検問が終わり、漆黒の剣とシズの番が来たところだった。彼らは彼女に大きな謎を感じながら前へと進んだのだった。

そして案の定シズは検問所で止められた。彼女がラナー王女に匹敵する美しさを持っていたことや、彼女の装備の全てに鑑定しきれないほどの魔法がかかっていたことも検問所の兵士たちを驚かせたが、止められた理由はそこではない。

金がない。それが唯一の理由だった。

シズ・デルタはNPCである。少なくともユグドラシルではNPCが金を使う機会など存在する訳がない。ゆえに彼女は一銭も持たされておらず、無一文だった。

このままでは都市に入れず餓死するのも時間の問題だろう。そこへ救いの手を差し

伸べたのが先ほどドン引きされた男、ルクルットだった。

「まあまあ兵士さんたち！その子が入れないのは通行料の問題だけだろ？なら俺が払うからさ、通してあげてよ」

「知り合いなのか？」

「告白したりされたりした仲なんだよ」

「……………告白されはしたけど、告白してはいない」

シズは自動人形オートマトンの気質なのか、少女として聞き捨てならなかったのか事実の訂正を行った。

「ああ、そういうことならいい。ほら、早く払って通れ」

兵士はめんどくさいものを見たような目でそう言うと、ルクルットから通行料を受け取ってシズを通した。

シズは思う。この人間たち、特に通行料を貸してくれたルクルットという男がやたらと好意的なのは自分の外見が働いているのだろうと。この魅力という力によって、自分は都市に入ることができる。創造主は、博士は今もその御力で自分を守ってくれているのだ。彼女は自らの創造主への畏敬と感謝の念を一層深め、例え何を犠牲にしようとも絶対にナザリツクへ帰還しなければならぬと決意を改めたのだった。

そしてエ・ランテル市内へ入ったシズは驚きで立ち止まる。

「……………うわぁ」

右を見ても人間、左を見ても人間。どこを見ても人間、人間、人間。かつてナザリツク地下大墳墓におよそ1500人も人間の集団が攻め込んできたと聞いたことはあったが、外から見た都市の大きさと中から見た人口密度を合わせて考えれば総人口は1500人どころか数万人、数十万人はいるのではないだろうか。

「そういう感動の『うわぁ』を俺のときにも聞きたかったな……………」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないルクルット。シズさんは人が多いところは初めてですか?」

「……………うん」

「はぐれないように気をつけるべきであるな!」

「よっし。ならシズちゃん、俺と手を繋ごう!」

「シズさん、僕と手を繋ぎましょう」

「……………分かった。ルクルットと繋ぐ」

「諦めろルクルット。完全に脈無しだ。……………えっ!」

「いやまだだ!諦めたら勝負は終わりだろ!?!……………えっ!」

「……………?」

漆黒の剣の面々が驚愕する一方でシズは無表情のまま首を傾げていた。そのシズに恐る恐るペテルが問いかける。

「あの、シズさん……今なんて？」

「……………ルクルットと繋ぐ、と言った」

「そ、それはお付き合ひしてくれるってこと!？」

「……………それは嫌」

「つまり、どういうことであるか!？」

「……………ルクルットと交際する気はない。でも、ルクルットは私のことが好きで通行料を貸してくれた。……だからお礼」

「えっと、よかったですね。ルクルット」

「ニニヤ、教えてくれ。俺は手を繋げることを喜ばば良いのか？ 付き合えないことを悲しめば良いのか？」

ルクルットの真顔の問いにニニヤはそつと目を逸らした。

居た堪れない空気を変えるべくペテルがシズに尋ねる。

「そういえばシズさんは何か働き口に予定はありますか？ やはり、故郷に帰るにも当面の生活費は稼がなければなりませんし」

「……………冒険者になりたい」

「例えば権力者や豪商の護衛とかではなくですか？冒険者は死ぬかもしれませんよ？」
「……………私が仕えるのは至高の御方々だけ」

エメラルド
翠玉の眼差しに鋼の如き忠誠心を見たペテルはそれを尊重することにした。

「分かりました。では登録の為に冒険者組合に行きましょう。初めは誰でも銅カッパですから、先輩として色々教えますよ」

「そうそう、手取り足取り何でも教えるぜ！」

「魔法のことなら聞いてくださいね」

「森のことなら任せるのである！」

「……………ありがとう」

四人の善意に礼を言って、ふとシズは大事なことを思い出す。この街に入ろうとしたそもそもの目的だ。

「……………聞きたいこと、ある」

「おつ、さつそくか！シズちゃんが知りたいことならこのルクルットお兄さんが何でも教えてあげちゃうぜ！」

「落ち着いてください。多分ルクルットが知ってることじゃないですから」

「むしろ変なことを教えないように監視すべきである！」

「ニニヤもダインも言いすぎだ。ルクルットも悪気があるわけじゃないんだ。答えられ

ないだろうけど」

「お前らなあー!?!」

相変わらず仲のいい四人を見ながら、シズは至近において最も重要な質問をした。

「……………この街で手に入る、最もカロリーが高い飲料は？」

その意図が分かるような分からないような質問に、四人は顔を見合わせた。

こうして、シズは漆黒の剣に連れられて冒険者組合へ行き、酒代のために冒険者になるのであった。

続く。

シズちゃんが飲酒と賭博を覚える話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△。通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

オートマトン 彼女は自動人形という異形種であり、いくつかのモンスター能力を持つ。例えば毒に
 対する完全耐性などだ。

そんな彼女は今、死屍累々と言わんばかりに酔い潰れた冒険者達に囲まれて酒を飲ん
 でいた。

ことの始まりは冒険者組合での登録まで遡る。

漆黒の剣に連れられて冒険者組合のウエスタンドアを通り抜けたシズ・デルタを迎え
 たのは冒険者達の無遠慮な視線だった。ある者はその美しい容姿に目を見開き、ある者
 はその奇抜な格好から来歴を噂する。それらが無表情で受け止めたシズは受付のカウ
 ンターまで漆黒の剣について行く。

そしてリーダーのペテルが受付で仕事の報告と報酬の受け取りを済ませた後、シズを
 受付嬢に紹介した。

「イシユペンさん、こちらはシズ・デルタさんです。冒険者登録をしたいそうです」
 「冒険者登録ですか？」

てつきり、どこかの貴族が趣味で変わった格好をさせているメイドか、さもなければ売れている大道芸人かと思っていたイシユペンは、どちらにせよ依頼に来たのだと思っていた。しかしペテルの言葉にじっとシズを見る。その装備は一目見て分かるほど上質なメイド服に金属鎧を組み合わせたようなものだった。一応金属板を備えているが、胸を覆っていないなど実用性には疑問が残る配置だ。そしてイシユペンの肩ほどまでしかないであろう背の低さから歳は10か11ほどに思える。美少女ではあるが、それで冒険者が生き残れる訳ではない。彼女はシズが冒険者に向いていないと結論付けた。

すぐに死んでしまうのが目に見えているし、彼女の歳で死ぬのは流石に忍びない。彼女の容姿なら働き口はいくらでもあるはずだ。そう考えた彼女は、この美しい少女、というか女兒をいかに諦めさせるか頭を回転させ始めた。

「えっと、シズちゃん？あなたはまだ小さいから、冒険者になるのは早過ぎると思うわ。毎日こわーいモンスターと戦わなきゃいけないのよ？」

「……………問題ない。……………戦闘能力はある」

「そんな難しい言葉どこで覚えたのか知らないけれど、戦ったことなんてないでしょう？」

「……………ない。でも大丈夫。……………力は強い」

「力は強いって……………あつ、そうね！ならその壁際にある大きな鞆を持ち上げてくれる

かしら？それができたら冒険者になってもいいと思うわ」

「……………分かった」

イシユペンは新人が荷物持ちポーターとしてやっていけるかの検査のために置いてある鞆を指した。それに向かってトテトテと歩いていくシズを見ながら、これで彼女が早死にすることはないだろう、と思った。

「……………できた」

「ああ、やつぱり重、えっ?」

イシユペンが思考から抜け出して目の前を見ると、そこには成人男性でなければ持ち上げられないはずの大きな鞆を片手で軽々と頭上に掲げて来たシズがいた。冷たい輝きを宿した翠玉エメラルドの瞳はどことなく自慢げですらある。しかしイシユペンは呆然として返事を返せない。

「……………まだ足りない?……………なら」

彼女はそう言うのと空いているほうの手で近くにあつた長椅子まで軽やかに歩いていき、それを『座っている冒険者ごと』掲げた。

「う、うおおお!!」

「お、下ろしてくれ!!」

「悪かった!大道芸人とか言つて悪かったから許してくれ!!」

座っている冒険者達から抗議の声上がるがシズは聞こえていないかのようにもう一度、先程のセリフを繰り返した。

「……………できた」

「わ、分かりました！分かりましたから下ろしてください！ゆっくりと！ゆっくりとですよ!!」

その言葉を受けてシズは長椅子と大きな鞆をゆつくりと寸分違わぬ位置に戻し、また受付までトテトテと戻ってきた。

こんな小さな女の子がどうやったらこれだけの筋力を手に入れられるのか。まさかあの金属板はダンベル代わりの鉛でも入っているのだろうか。私も大道芸人かと思っただと言っていたら椅子ごと持ち上げられていたのだろうか。イシユペンの頭の中は疑問で一杯だったが、意志力でそれを押しつけて仕事をこなそうとする。しかしそれはすぐには叶わなかった。

「すごいじゃないですかシズさん！」

「まさに怪力無双であるな！」

「すごいなシズちゃん！」

「シズさん……尊敬します！」

「……………照れる」

シズを連れてきた漆黒の剣が彼女を取り巻いてわいわいと騒いでいた。イシユペンは彼ら五人の注意をこちらに向けられるべく、握り拳で机をドンドンと強めに叩いた。そして彼らがこちらに目を向けると、こほんと小さな咳払いを一つした。

「それでは冒険者登録を行います。まず必要書類ですが」

「あ、俺が払うよ。シズちゃん今財布持つてなくてさ」

「……………ありがとう」

「では必要事項をお書き下さい」

イシユペンはルクルットから銀貨を受け取ると、シズの前に羽ペンとインク壺を添えて登録用の書類を出した。しかしそれが彼女の手で記入されることはなかった。彼女は極寒の視線をカウンターの羊皮紙に送りながら静かに言う。

「……………読めない」

「えっ？何か難しい単語がありましたか？」

「……………言語体系が違う」

「ああ、王国の外からいらしたのですね。代筆料は…………」

「それも俺が払うよ」

「かしこまりました。ではまず登録名を教えてくださいますか？」

「……………シズ・デルタ」

シズは少し悩んだが、既に名乗っている通称だけを答えた。彼女の正式名称はC Zシーゼットニイチニハチデルタ2128・△であるが、その名前で呼ばれることはナザリックでもほぼ無い。それに、もしかしたらこの正式名称はナザリックの一員と、転移させた犯人と、無関係に騙そうと近付いてきた存在とを見分けるのに使えるかもしれない。ナザリックに所属するものが至高の御方々に与えられた名を、他者のものとはいえ間違えるはずが無いのだから。少して、必要事項を全て書き終わったイシュペンはシズにもう一つ必要なことを尋ねる。

「講習は今から受けますか？」

「……………時間かかる？」

「さほどかかりませんよ」

「……………受ける」

実はシズはこの時点では何についての講習かを理解していない。しかし必要かつ時間がかからないならさっさと済ませてしまおうと思ったのだ。そろそろ空腹が限界に近づいてきたことでもあるし。

このときイシュペンは筋力を調べたときに驚かされた仕返しにちよつとした意地悪をしようと考えた。といつても、必要なことを教えないとかではない。そんなことをすれば自分のミスになるし、何よりそこまで酷いことをするつもりはない。ただ単に、講

習の内容、即ち冒険者の基本的な知識について『早口』で説明するだけだ。

そして彼女の過去最高速の早口によって報酬、罰金、難度についての説明が5分ほど立て続けになされた。その情報の洪水に講習を受けたことがある漆黒の剣すら目を白黒させている。そして説明が終わると、彼女は「どう？聞き返しても良いのよ？」と言わんばかりの意地悪な笑みを心の中に浮かべてシズを見た。しかし――。

「……………報酬の20%が調査費で組合に引かれる。……………緊急時は5%。……………失敗したら冒険者が調査費と同額を依頼者に払う。……………前金は1.5倍を払う。……………難度でクラスが分けられる。……………クラスを超えた依頼は受けられない。……………合ってる？」

「……………合っています」
相変わらずの無表情でさらりと要点を纏めてみせるシズにイシュペンは呆然と答える。

（負けたわ……………でも、まだ終わらない……………！見ていなさい、次は聞き返させてやるんだから……………！）

彼女の翠玉エメラルドの瞳に、イシュペンは冷たい輝きではなく熱い闘志を見た。たしかに負けた。だが戦いはまだ終わっていない。彼女か自分がその立場を離れるまで、決して諦めることは無い！受付嬢イシュペン・ロンブルはそう決意した。もつとも、シズの心には空腹の二文字しか浮かんでいなかったが。

そして登録と講習が終わり、銅のプレートカッパを受け取ったシズは漆黒の剣に案内されて駆け出し冒険者向けの安宿へ向かった。

ここが、これから起こる惨劇の舞台である。

「ひ、ひい!? 『怪力のシズ』だ!」

安宿に入った彼女を最初に出迎えたのはそんな言葉だった。見ると、冒険者組合で掲げた長椅子に座っていた冒険者の一人だった。長椅子を下ろした後に彼らはどこかに逃げ出していたが、どうやら避難先はここだったらしい。

その言葉をきっかけに室内の冒険者達が一斉に彼女へ眼を向けて、ひそひそと話し出した。

「あれが三人を長椅子ごと持ち上げた……」

「十人じゃなかったか?」

「大道芸人って言ったら殺されるらしい」

「かわいいぜ……」

その話し声に漆黒の剣は苦笑いしながら、シズは無表情でカウンターまで歩いていく。そして筋骨隆々、全身古傷だらけの店主にペテルが話しかける。

「お久しぶりです。親父さん」

「おう、銀^{シルバー}級に上がってからはどうだペテル」

「仲間たちのおかげで何とかやっています。親父さんが引き合わせてくれたおかげです」

「ふんっ、おだてたって何も出ねえぞ」

「そう言いながらも店主は照れたようにそっぽを向いた。どうやら正面きつて感謝されるのが苦手らしい。」

「それで、後ろのちっこいのを案内して来たのか？」

「そうやって店主はペテルの後ろにいたシズに眼を向けた。小さい。それが店主の第一印象だった。冒険者はランクが上がると体格に見合わぬ怪力を発揮することがある。だがこの少女からはそのような歴戦の強者の雰囲気は感じられない。顔はとても美しいが、それで生き延びられる訳でもない。店主の中では、冒険者たちが口々に話していた『怪力のシズ』と目の前の『小さなシズ』がどうしても結びつかなかった。」

「はい。このたび冒険者になったシズさんです」

「……………シズ・デルタ。…………よろしく」

店主はこの小さなシズの覇気の無さが心配になった。冒険者の中には荒くれ者も多い。仮に怪力が事実だとしても、気が弱ければ要らぬ争いに巻き込まれることになる。そして怪力が事実ならばそのたびに怪我人が出るだろう。それは誰にとっても不利益

でしかない。

「そんなんでやっていけるのか？もつと腹から声出せ！」

「……………シズ・デルター……………よろしく！」

「……………まあ、今はそれでいい」

正直なところ不安なままだが、この様子では急な改善は難しいと店主は判断する。せめて冒険者の荒波に放り込む前にワンクッションおこうと考えて、店内をざつと見回した。そして噂話に参加せず、テーブルに出したポーシオンを眺めてにやにやしている女冒険者を見つける。同じ女で気が強い、ついでに言うならシズの噂を大して気にしていないあいつなら色々教えてやれるだろう。そう思つて彼女に面倒を見させることにした。

「おい、ブリタ！今日からお前と同室だ！面倒見てやれ！」

「は!?!大部屋でしょ!?!なんであたし!?!」

「お前がこの店で一番気が強い女だからだ！冒険者の心構えつてやつを教えとけ！」

「ええ〜!?!」

ブリタと呼ばれた短い赤毛の女冒険者は不満の声を上げるが、それを気にする様子も無くトコトコと近付いてきたシズに声をかけられる。

「……………シズ・デルター……………よろしく！」

「ああ、うん。よろしく……」

ブリタは困った顔をしながら、この奇妙な格好をした美少女にどうやって冒険者の心構えを教えるか悩んでいた。どう考えても自分とは性格が合いそうにない。自分の心構えをそのまま教えていいものだろうか。そう考えた彼女はまず彼女について知ることから始めた。そろそろ夕食時だから、好物について尋ねるのがいいだろう。

「えっと、何か好きな食べ物とかある？」

「……………蒸留酒」

「…………いや、食べ物聞いたんだけど……」

彼女の的外れとしか思えない回答にブリタが（不思議ちゃんかー）と困っていると、そこに店主と話している漆黒の剣から離れてルクルットがやって来た。

「やつほーブリタちゃん」

「ブリタちゃんって……あんだ、たしか美人を見るたびに口説いて回ってる男だよね？」

「まあまあ、その話は今はいいじゃんか」

「何の用？」

「シズちゃんあんまり沢山喋らないからさ、サポートしようと思って……実はシズちゃん、体質で大量のカロリーが要るけど液体しか口に出来ないらしいんだ」

「そうなの？」

「……………うん。……だから、蒸留酒」

本当は超高カロリーの専用ドリンクが最適なのだが、現地で入手できそうに無いので諦めている。そしてシズは今まで酒を飲んだことがないのでとりあえず高濃度のエタノールという意味で蒸留酒をあげている。

「いやでも、蒸留酒が主食って流石に体に悪いでしょ?」

「……………大丈夫。……酔わない」

「いや、お酒に強くても限度があるでしょ」

「……………この店の冒険者が……全員潰れる量を飲んでも……酔わない」

「あっはっは!それは流石に無理でしょ!そもそもそんな大金持つてるなら私にも奢ってよー!」

ブリタは余りの荒唐無稽さに思わず笑い出してしまった。だが、そのときシズに電流走る……………ッ!

「……………なら、こうする。……この店の冒険者が、私に奢る。……冒険者は、私と同じ量を飲む。……私が先に潰れたら……全額二倍にして返す」

「……………マジで?」

「……………何をしてでも……二倍にして返す」

その言葉に店内の冒険者がざわつく。この店の冒険者は銅^{カッパー}級か鉄^{アイアン}級である。鉄^{アイアン}

級以下の冒険者というものは長い間酒を断ち、爪に火を灯す^{とも}思いで生活費を切り詰め、依頼を必死にこなしてやつとポーション一本を買えるほどカツカツの生活をしている。そんな彼らが『こんな小さな少女を酔い潰しただけで金が二倍になる』と聞いて欲を抑えられなくなったとしても、誰が責められようか。

「よく言ったシズちゃん！その話乗ったぜ！」

「俺も乗った！いまさら無しだなんていうなよ!？」

「俺もだ！」

「俺も俺も！」

「シズちゃん万歳！」

誰かが声を上げれば次々に「乗った乗った」と騒ぎ出し、ついにブリタと漆黒の剣を除く全ての冒険者がその賭けに乗ってしまった。その状況にルクルツトとブリタは呆れ半分、焦り半分の声を出した。

「おいマジかよシズちゃん……大変なことになっちまったぞ……」

「あたし、知らないからね……」

カウンターで店主と話していたペテルは心配そうな視線をシズに向けながら、店主にどうしたものかと声をかけた。

「親父さん……」

「まあ、すぐに潰れて軽い借金で済むだろ。うちでこき使つてやる」

「ありがとうございます」

「ふんつ、お前に礼を言われることじゃねえよ」

店主はシズに給仕と掃除でもさせればいいのかと思つていた。あの外見なら客の冒険者どもも喜ぶだろう、と。

別に、賭けに乗つた冒険者たちはシズを破滅させようとしてゐる訳ではない。『怪力のシズ』が話通りならばすぐに二倍くらい稼ぐだろうし、できなくても貸しを作れば仕事が楽になると思つただけだ。中には酔い潰していい目を見たいと思つてる変態もいたが。

そして、冒頭に至る。

店内で起きているのは店主とブリタ、そして今も蒸留酒を口にしてゐるシズだけである。漆黒の剣は自分達の夕食もあるので、惨劇が起こる前に店主とブリタに任せて中級の宿に帰つてしまった。

「あんた、本当に酔わないのね……」

「……………体質」

「にしたつて……………どれだけ飲んだの？」

「……………シヨットグラス40杯……………およそ一リットル」

「……………死ぬわよ?」

「……………体質」

「……………もう、それでいいわ……………」

ブリタは火がつくような蒸留酒を水のように飲むシズの酒豪っぷりを、何かを悟ったような顔で受け入れた。

ユグドラシルにおいてもこの世界においてもアルコールは毒である。正確には毒として魔法やアイテム、モンスター能力に弾かれる。だから毒に対する完全耐性を持つシズは、いくら飲んでも酔うということがない。

なお、シズが普段飲んでいた超高カロリーの専用ドリンクはコップ一杯、およそ0.2リットルで数千キロカロリーである。エタノールが1リットルで約7000キロカロリーなので、今回飲んだ蒸留酒のカロリーは専用ドリンクおよそ1〜2杯分だ。

シズ・デルタの異世界での主食が決定された瞬間である。

「……………苦い」

それでも、味だけはどうかならないかと、専用ドリンクのストロベリー味を懐かしく思うシズであった。

続く。

シズちゃんが悪堕ちしそうな話

シーゼットニイチニハチ デルタ
C Z 2 1 2 8 ・ Δ 通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女はカルマ値をプラスに設定されたNPCであり、その行動原理は基本的に善意に基づくものだ。ゆえに他人を破滅させるような行動をとるとしたら、それはその他人がどうしようもない悪人であるか、もしくは『地獄への道は善意で舗装されている』というような状況が多いはずだ。

そんな彼女は今、眼前の青ざめた男を破滅させようとしていた。

ことの始まりは当日の朝まで遡る。

昨晚、シズは飲みくらべで酔い潰した冒険者達を店主とブリタの二人と協力して部屋のベッドに放り込むと、自分も割り当てられた大部屋のベッドで人間のふりをするために朝までじっとしていた。アイテムボックスの確認をしようかとも思ったが、万が一誰かが起きだして見られたら面倒なことになると思ったので諦めた。

そして東の空が白み始めると誰よりも早く起き出して食堂へ降りたが、店主がいなかったのでテーブルに逆さで載せてあった椅子を下ろして一人座って待っていた。そこへ筋骨隆々、全身古傷だらけの店主が現れる。

「……………おはよう」

「ああ、おはようさん。その様子だと二日酔いもないみたいだな。いま飯を用意するか
ら待ってろ」

「……………蒸留酒」

「……………液体しか口にできないし、蒸留酒じゃないとカロリーが追いつかないんだつたな。
分かった、待ってろ」

店主は昨晚の惨劇を思い出しながらシズに一番きつい酒を出した。シズが酔い潰れた
冒険者の大部分を運んだので、彼は別に怒っていない。むしろ、何人もの男を軽々と
担いで階段を往復する様は『怪力のシズ』の噂が事実であったことを証明し、彼はシズ
に一目置くようになっていた。

「……………そういえば、私の……………宿代と食費は？」

「漆黒の剣が代わりに払ったぞ。あとで礼を言っとけ、蒸留酒つてのは1本で銀貨1枚
はするんだからな。それと、食費じゃなくて酒代だろ」

「……………これ以外、主食にできない……………食費」

「まあ、どっちでもいいがな。ところで、さつきから蒸留酒としか言わねえが、酒の好み
は無いのか？」

「……………苦いだけ」

「はっは！舌はまだまだ子供か！」

店主は、怪力酒豪のシズといえど見た目通り幼いところもある、と愉快になった。しかし、同時に幼い頃から苦いだけのものを主食とせねばならないことを不憫にも思った。

「……でもまあ、苦いだけの食事じややる気が出ねえだろ。スープを持つてくるから待つてろ。飲めるよな？」

「……………飲める」

「よし」

少しして、奥の厨房から戻ってきた店主が出した温かいスープをシズはゆっくりと味わって飲んだ。それは簡単な野菜スープから彼女の為に固形の野菜を抜いたものだったが、この異世界に来て初めてまともな味のを口にしたシズは、ようやく人心地付いたのだった。

「……………今日……………頑張る」

「ああ、頑張つて行つて来い」

ちなみに最初に主食として出された1リットルほどあるボトルの酒はスープが来るまでに水のように飲み干されていた。

そこへ昨晩唯一酒を飲まなかった冒険者であるブリタが降りてくる。彼女は二人の

姿を確認すると朝の挨拶をしようとしたが、テーブルの上においてあるボトルを見つけて驚きの声を上げる。

「おはよう、二人と……うわっ!? また飲んでる!?!」

「……………もう飲んでない。……飲み終わった」

「いまはスープ飲んでたところだ」

「それって朝っぱらから飲んでたってことじゃない……これ一本全部空けたの?」

ブリタはテーブルに近付き、空のボトルを持ち上げて眺めた。

「……………食前酒」

「主食じゃなかったのか?」

「……………蒸留酒は……苦い。……口直し……いる」

「えっ、なにそれ。苦いと思ってーリットルも飲んでたの?」

「……………」

シズがシズが無言でこくりと頷くと、ブリタは愉快なものを見つけたと言わんばかりに笑い出した。

「あははははは! なにそれ! あんなに沢山の男を酔い潰しといて本人は苦いと思っ
てなかったとか!」

どうやら昨晚の周りの男たちとシズのギャップが面白かったようだ。

「そんなに笑ってやるな。酒の旨さも分からん頃から酒を主食にしなきゃいけなかったんだ。無表情にもなる」

「……………親父さんも、笑ってた」

「……………そうだったか？」

とほける店主に翠玉エメラルドの瞳から極寒の視線が刺さる。店主は思わず降参した。睨んでる訳でもないのに視線が冷たいのはなんでだろうな、などと益体もないことを考えながら。

「分かった分かった。俺が悪かった。だからそんな目で見るな」

「あつはつはつはつは！」

ブリタはそのやり取りがおかしかったらしく、ますます笑い声を大きくしたのだった。店主はその笑い声を聞きながら「今日はいいい日になりそうだな」と何となく思った。

朝食を済ませたシズは店主からの言いつけで付いてきたブリタと一緒に朝早く冒険者組合へ向かった。彼女は昨日の夕方と同じようにウエスタンドアを通るが、今度は無遠慮な視線を送られることはない。むしろ誰もがさつと目を逸らし、彼女と受付のカウンターの間にいた者達はまるで聖者に道を開ける群集のようにその場を退いた。

そしてシズの視線が通った先には自称好敵手ライバルの受付嬢、イシユペン・ロンブルが待ち

構えていた。なお、誰にも言っていないので実際には自称どころか自認でしかない。イシユペンはシズの翠玉エメラルドの瞳から発せられる極寒の視線を正面から受け止め、むしろ自分の目からも光線を発しているかのような気持ちで彼女と視線を交わした。二人の視線がぶつかり合い、火花が散る。という様な幻覚をイシユペンだけが見ていた。

「おはようございます、シズ・デルタさん。本日は何のご用件ですか？」

彼女は先手を取らんと言わんばかりに普通よりも離れた距離から、意識して滑舌よく挨拶した。それに対してシズは昨日と同じようにトコトコとマイペースに歩いて受付の前に立つてから返事をした。

「……………おはよう。……………初仕事」

イシユペンは（くっつ、この程度では牽制にすらならないと言うの!?!）と思いつつながら、何が何でもシズに聞き返させるべく昨日から一層鍛え始めた早口を放つ。

「依頼は基本的にそちらの掲示板に張り出しています。依頼を受けるときは張り出している依頼書を剥がして受付まで持ってきて下さい。なお、まれに指名依頼というものが発生することがあります。これは依頼主が冒険者を指定して出される依頼です。報酬や難度、緊急性は様々ですが、基本的に有名でない冒険者には縁のない話だと思ってください。つまり有名な冒険者でなければ受けられることはまずない、冒険者にとつてのステータスの一種だと言っても良いでしょう。ちなみに昨日話した講習の内容は覚え

ていますか？」

これでどうだ！とでも言わんばかりの顔で彼女は口を閉じた。昨日の早口を超える剛速球に加え、最後は昨日の講習の内容を尋ねるといふ変化球だ。流星の『怪力のシズ』もこれには耐えられまい！と彼女は思った。しかし――。

「……………報酬の20%が調査費で組合に引かれるが緊急時は5%で済む。……………失敗したら冒険者が調査費と同額と前金の1.5倍を依頼者に払う。……………難度でクラスが分けられクラスを超えた依頼は受けられない。……………文字が読めない冒険者に代わって依頼を見繕うサービスはある？」

「……………あります」

「……………お願い」

「……………はい」

イシユペンは呆然とした。わが好敵手^{ライバル}、シズ・デルタは昨日の講習の内容を昨日より簡潔かつ明瞭に説明した上で、依頼に関する説明を全て理解、記憶して的確な質問を投げかけてきたのだ。変化球を完全に捌かれ、剛速球も正面から打ち返された。敗北だ。誰の目から見ても明確な敗北だ。彼女の目にはうつすらと悔し涙すら浮かんでいた。

なお、勝負だとか戦いだとか思っているのはこの世でイシユペンだけなので、誰の目から見てもただの事務的なやり取りをやたら早口で行ったと思えば突然涙を目に浮か

べた変人受付嬢である。

気付けばいつのまにか漆黒の剣もやって来ていて、シズとブリタの後ろから変なものを見る目でイシユペンを見つめていた。

シズの初仕事はブリタと漆黒の剣を合わせた6人での街道のモンスター討伐に決定した。イシユペン曰く、ランクを上げるには昇格試験を受ける必要があるが大概モンスターと戦う内容なので実戦経験をまず積むべきだ、とのことだ。漆黒の剣という銀級チームと一緒に事故死もまずないだろう、という計算もされている。

漆黒の剣はシズの初仕事だということから安全性を第一とした。例えば怪力無双でも実戦経験がないことに違いはないのだ。ゆえに彼らはどうしても人類生存圏の隙間になりやすい国境方面ではなく、人の往来も頻繁でモンスターが少ないであろう王都側の街道をモンスター討伐のために進むことにしたのだった。

そして、この判断が惨劇を起こす。

彼らは確かにモンスターとはあまり会わなかったし、会っても弱いはぐれモンスターばかりだった。だが彼らはモンスターよりもよっぽど厄介な存在に囲まれた。すなわち人間、野盗団である。

最初は街道に倒れた馬車が転がっていたことから、事故で転倒したのかと思った。そ

して近付いてみるとうめき声が聞こえたことから、馬車の中で人が怪我をして動けなくなっているのだと判断したのだ。

しかし、身軽なルクルクットが近付いて横倒しになった馬車の上に乗り、扉を開けると中にいたのは手足を縛られて猿轡をかまされた裕福そうな商人だった。その時点になつてやつと彼らは罨だと気づいたが、時既に遅し。周囲を30人はいようかという野盗団に囲まれていた。

銀^{シルバ}級冒険者というのはよく訓練された兵士と同じくらしいの戦闘能力があると見做されている。すなわち王国の主力である一般的な農民兵より強く、帝国の主力である職業兵士たる騎士に匹敵する強さだということだ。しかし、野盗団というのは戦時には傭兵団として雇われる職業兵士の集団である。つまり、銀^{シルバ}級冒険者30人に囲まれたのと同義の状況に彼らは追い込まれたのだ。

「くそっ！お前達、何者だ!?!なんでこんなところで罨を張っている!?!」

ペテルの誰^{すいか}何する言葉に返ってきたのはゲラゲラという大勢からの笑い声だった。冒険者の宿で聞くようなものではなく、明らかに人を苦しめ、殺し、財貨を奪うことに愉悦を感じている悪意に満ちた笑い声。30人分のそれが漆黒の剣とブリタの神経を削る。

「冥土の土産に教えてやるよ。俺たちは死を撒く剣団。その馬車を襲つてる時に斥候

がお前らを見つけたから、罨を張ってついでに頂いちまおうって話になったのさ。運が悪かったなあ?」

「男は殺すが、女のほうはかわいいがってやるから安心しなあ!」

屈強で自慢げな男の説明にニヤニヤと嗜虐的に笑う男の言葉が続き、再びゲラゲラと耳障りな笑い声が響く。ブリタはその言葉に威圧され剣を持つ手が震えていた。

ペテルは歯を食いしばり、声を張り上げて仲間達に指示を出す。

「皆! 円陣を組め! ここは王都に向かう街道だ! 時間が経てば誰かが通る! それまで持ちこたえるんだ!」

「おう! こんなところで死んでたまるかよ!」

「一念岩をも通すのである!」

「ええ! 今まで何度も死線を潜り抜けてきたんですから!」

「や、やってやる! やってやるんだから!」

このときの彼の判断は銀^{シルバー}級4人と鉄^{アイアン}級1人、そして未知数の銅^{カッパー}級1人という戦力からすれば最適なものだった。だが、最適な判断をすれば生き残れるというほど、この世は甘くない。

戦力比は1:5以上。攻め方3倍の法則を当てはめても絶望しか見えない数字だ。そして死を撒く剣団は長年この街道を狩り場にしており、人が通る時間の間隔を把握して

いる。神はサイコロを振らない。数学的に絶望しか見えない状況は、数学的に絶望をもたらず。彼ら漆黒の剣とブリタの命運はここで尽きたのだ。

なお、難度130越えの超大型新人の存在は考慮しないものとする。

数分後。そこには呆然と立ち尽くす5人と地面に倒れてうめく30人、そして拾った木の枝でうめいている怪我人をつんつんと無表情でつついているシズ・デルタがいた。

ちなみに馬車の中の商人は馬車が揺れるほど暴れてやつと思いい出してもらえた。

「いやあー！本当に助かりました！私はバルド・ロフーレ。エ・ランテルで食料を主に取り扱っているロフーレ商会の主です。皆さんはエ・ランテルの冒険者ですか？」

「はい。私達はエ・ランテルの銀^{シルバー}級冒険者チーム『漆黒の剣』です。私がリーダーのペテル・モーク、彼がルクルツト・ボルブ、小柄なほうの魔法詠唱者がニニヤ、大柄なほうの魔法詠唱者がダイン・ウッドワンダーです。そしてこちらの鉄^{アイアン}級の彼女はブリタさん、銅^{カッパー}級の彼女はシズ・デルタさんです」

「おお、ペテルさん、ルクルツトさん、ニニヤさん、ダインさん、ブリタさんにシズさん！このバルド・ロフーレ、あなたがたから受けた恩は決して忘れません！」

助けられた商人、バルド・ロフーレはシズたち6人の名前を即座に全て覚えて諳^{そら}んじてみせ、1人ずつに握手をして感謝を述べた。その丁寧な姿勢に彼らは自然と好感を抱

いていた。こういう振る舞いが、裕福になる手腕の一つなのだろう。

「それで、ロフーレさんはどうして一人で馬車の中にいたんですか？部下の方はどこへ？」

「バルドとお呼びください。あなたがたは命の恩人なのですから。……部下のことですが、恥ずかしながら、その部下に裏切られたのです。商会の人手が急に足りなくなつて雇つた部下だったのですが、仕事ぶりは真面目で有能だったのです。なので今日、急に王都へ行かねばならない用事で彼の手配した用心棒に護衛を任せて出発したのですが……」

「その部下と護衛が野盗団の一員だったと」

「はい……。商人として人を見定めるのには慣れていたつもりだったのですが……。それがかえつて油断を招いたのかもしれないね……」

バルドはさも悔しそうな顔で呟いた。すると、その彼の袖をぴんぴんと引っ張る小柄な人物がいた。蒸留酒が主食のシズ・デルタだ。

「何ですか、シズさん？」

「……………蒸留酒、扱つてる？」

「勿論取り扱つておりますよ。エ・ランテルは戦争で数十万人の兵士が集まる街ですからね。嗜好品としてだけでもなく、ポーシヨンや薬草が足りない時の応急処置で消毒液

としても使います。それがどうかされましたか？」

「……………私、全部倒した」

「全部？」

バルドが漆黒の剣とブリタに眼を向けると、真剣な眼差しで見返された。最初にペテルが口を開く。

「事実です。私達は自分の身を守るのに精一杯で、彼女が実質的に30人全員を殺さずに無力化しました」

「……………なんと……………!？」

「本当だぜ、バルドさん。シズちゃんは冒険者組合で冒険者3人を長椅子ごと頭上に掲げる筋力の持ち主だ。『怪力のシズ』なんて呼ばれてる」

「シズ氏の強さは我々が保証するのである！」

「ええ、彼女は本物の英雄になれる、いえ、今ですら本物の英雄と言えるだけの力を持っています」

「悔しいけど、私達5人を合わせた力より圧倒的に強いわ」

他のメンバーも皆一様に肯定するだけで、誰も異議を唱えようとしなかった。つまりこの美少女というにはやや幼過ぎる彼女が本当に銀^{シルバー}級と同等と言われる職業兵士を30人も1人で倒したのだろう。それも1人も殺さないという余裕を持って。バルドは

その考えに至って驚愕に目を見開くと、その視線を真つ向から受け止めたシズから言葉が発せられる。

「……………私、命の恩人」

「え、ええ。そうですな」

バルドはこの小さな実力者がどんな要求をするのか、冷や汗をかいて耳を傾けた。

「……………恩返し、蒸留酒一生分」

「……………わつはっは！その程度でしたらお安い御用ですよ！」

なんだそんなことか、とバルドは予想以上に軽い要求で上機嫌に笑った。蒸留酒は1リットルのボトルを開けるのに半月以上かかる。毎年20本開けても出費は金貨1枚程度、1000年分でも金貨100枚だ。バルドの命の値段としてはあまりにも安い。それに11歳ほどで既にとんでもなく強い彼女とのつながりが一生続くと思えば圧倒的に得だった。

そう思つて笑う彼と、そんな彼を見つめるシズに対して漆黒の剣とブリタはとてつもなくえげつないものを見たような顔をしていた。

「何事にも限度というものがあると思いますよ……………」

「シズちゃん、流石にそれは引く……………」

「いくらなんでもえげつなすぎるのである……………」

「シズさん……それは流石にちよつと……」

「いやいや皆さん、ロフール商会を侮つてもらつては困りますな。この程度命の恩人への礼儀と思えば安いものですぞ！」

彼は気付かない。自らの計算ミス。そして漆黒の剣が彼に向ける養豚場の豚を見るような目を。そんな彼を不憫に思つたのか、ブリタが具体的な金額を口にする。

「シズ……、あんたそれはいくらなんでも酷いわよ。あんたのペースの一生分つて、金貨10000枚はかかるでしょ？」

「は？」

バルドは彼女が何を言っているのか分からないという顔をした。この小柄な美少女が蒸留酒で金貨10000枚とはどういうことだろうか。そんな彼に追い討ちをかけるつもりはないのだろうか、シズは淡々と事実を訂正する。

「……………それは違う。……………蒸留酒1リットルを銀貨1枚、金貨1枚を銀貨20枚とした場合、1日で3リットル、1年で1,095リットル、100年で109,500リットル。……………すなわち金貨5000枚以上必要。……………運動量が増えれば、倍の10,000枚は欲しい」

金貨10,000枚。そんな金額を払えば商会は破産する。はつきり言つて自分を人質にして身代金を取るつもりだっただろう野盗団でもそんな金額は要求しないだろう。

1000年分割にしても毎年金貨1000枚。彼女が死ぬまで負担し続けるなんて、ただ繋がりが続くだけにしてはあまりにも重い。あまりの金額にシズが何を言っているのか理解できていないバルドに、哀れみの目を向けたニヤが説明する。

「バルドさん、彼女は液体以外を摂取できないのに大量のカロリーが必要な特殊体質なんです。なので火がつくような蒸留酒を1日3リットルは口にしないと死んでしまます」

「……………いや、いやいやいや。そんな馬鹿な……………」

「……………事実。……………あなたは言った……………お安い御用、と」

「い、言いはしましたがそれはあなたがそんな特殊体質ではない前提での話です……………！常識で考えてみてください……………」

「……………お安い御用なら払えるはず……………即金で……………金貨10,000枚」

「そ、そんなことをすれば私は破滅です！」

そして、冒頭へ至る。

バルド・ロフーレ。それがカルマ値がプラスであるはずのシズ・デルタに善意も悪意もなく破滅させられようとしている男の名である。

シズの翠玉エメラルドの瞳から放たれる極寒の視線を受けたバルドはうろたえながらも必死に金貨10,000枚の出費を避けようとあれこれと弁舌を繰り返す。しかし彼女は一顧

だにしない。なぜならここで一生分の食費が得られれば大幅にナザリツクを探す時間を捻出できるからだ。

そんな口約束など無視すればいいと思う人もいるかもしれない。だが、相手は現時点、11歳ほどで既に英雄といえる力を持つている存在なのだ。今は良くても、将来復讐されないとなぜ言えるだろうか。シズの翠玉エメラルドの瞳から発せられる極寒の視線もその考えを後押しする。睨んでいるわけでもないのにこんな冷たい目をする少女など、成長したらどうなるか……！その不安がバルドを無視という選択から遠ざける。このままでは彼が破滅するのも時間の問題だろう。

しかし、それを止める人物がいた。まさかの、シズに惚れているルクルットである。彼はシズに語りかける。

「……待つんだ、シズちゃん。……たしかに一生分の酒代がもらえれば、冒険者をせずにナザリツクに帰る方法を探すのに専念できるかもしれない。……でも、恩人であることを笠に着て人を破滅させたりしたら、お父さんやお母さんはどう思う？」

「……………」

シズは考える。自らの創造主である博士のことを。あの至高の御方は私にプラスのカルマ値を与えられた。博士は私がカルマ値から外れた行動をすることをどう思うだろうか？……きつと悲しむに違いない。失望するに違いない。嫌がるに違いない。な

らば、自分は従うべきだ。その設定に。創造主が与えたもうた自らの形に。……自分はナザリックへ帰ろうとするあまり、自らの形を見失いかけていたようだ。

「……………悲しむ」

「だろ？ だったら、そんなことはしちや駄目だ」

「……………うん。……ありがとう、ルクルット」

「どういたしまして！」

シズはルクルットに初めて心の底から感謝し、彼はその感謝を心の底からの笑みで受け取ったのであった。

そのやり取りを見たバルドは金貨10,000枚という出費で破滅せずに済みそうだと思います、冷や汗を拭いながらほっと安堵の息をついた。

「ありがとうございます、ルクルットさん」

「別にいいさ。バルドさんがあんまりにもあんまりな条件を突きつけられてたからってのもあるけど、俺はシズちゃんに悪い道に堕ちてほしくないんだ」

「……なるほど。事情を全て知っている訳ではありませんが、どうか彼女が道を踏み外さないようにしてあげてください。彼女はまだ幼い」

「もちろん」

そんな彼を見つめるのは、驚愕に目を見開いた漆黒の剣の仲間とブリタだった。

「ルクルット、お前にも人を論すということができたんだな……嬉しいよ」

「あのルクルットがこんな立派になるとは……万事塞翁が馬であるな！」

「ええ、ルクルットはやればできる子だったんですね」

「ルクルット……あんたのこと少し見直したわ……でも、無理はしないようにね？自分を偽って生きるのは、辛いことなんだから……」

その褒めながらも貶しているような仲間の物言いにルクルットは思わず叫んだ。

「お前ら酷くねえ!?!たまにいいことしたらこれだよ!!」

「あ、自覚はあったんですね」

ニニヤのツツコミでオチたといわんばかりに一行は笑い声を上げる。周りには30人もこの怪我人がうめき声を上げていたが、彼らはそんなことを気にせず笑い続けた。

見ると、王都方面から隊商がやってきている。地面に転がっている野盗団は彼らに運ぶのを手伝ってもらおう。一行はそう考えて、隊商に手を振ったのだった。

続く。

シズちゃんが血に塗れる話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△。通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女は創造主に与えられた自らの形、カルマ値がプラスのシズ・デルタを見失うところだった。それをルクルットという人間に助けられて以来、彼女は正義とは言わずとも、善を成すべきだと考えている。

そんな彼女は今、血に塗^{まみ}れていた。

ことの始まりはエ・ランテル帰還直後まで遡る。

漆黒の剣とブリタ、そしてシズはエ・ランテルの衛兵に野盗団を突き出し、冒険者組合にモンスター討伐の成果とことの次第を説明した。その後、彼らは心身ともに疲弊したと言うことで各自の宿に帰ることにした。まだ日は高いが、明日のために心と体を休めるのも冒険者の仕事の一つだからだ。ただ、シズだけは残った。受付嬢のイシユペンにある手続きをしてもらうために。

「昇格試験、ですか？」

「……………受けて……………鉄^{アイアン}に」

どんなに強かろうとも昇格試験を受けなければ上のランクには成れない。それが

規則だと漆黒の剣とブリタに聞いた。だからシズは創造主に与えられた、一度は見失いそうになったカルマ値に則って昇格試験を希望した。

「分かりました。では昇格試験の内容を説明します」

「……………おねがい」

イシユペンは意識してゆつくりと、合間合間にシズが情報を咀嚼する時間を設けて説明した。彼女が求めるのはフェアな戦いで勝利である。野盗団30人と戦うという激戦で疲弊した好敵手^{ライバル}に止めを刺すことではない。それは勝利などではなく、ただの暗殺だ。イシユペン・ロンブルはシズ・デルタを好敵手^{ライバル}だと認めるがゆえに戦いを挑まなかったのだ。

シズはその遅さにごく具合でも悪いのかと、イシユペンの体調を心配していたが。

昇格試験の内容はエ・ランテル城壁外周部の西側区画のほとんどを占める共同墓地の巡回警備だ。20時、1時、5時に合計3回行い、1回につき30分から1時間はかかる。巡回の間は中央区画の墓守の建物で休んでいてよい。出てくるモンスターは、それを事前に自力で調べるのも試験のうちなので詳しくは説明できない。しかし銀^{シルバー}級に匹敵する野盗団30人を殺さずに倒したシズならば楽勝だろう、とはイシユペンの弁だ。

「それで、いつ受けられますか？拘束時間は17時から翌朝の6時までになりますので、

明日受けるなら今日はもう帰って休むべきだと思いますが」

「……………今夜」

イシュペンは目を見開いた。わが好敵手ライバルの顔は相変わらずの無表情で、冷たい輝きの翠玉エメラルドの瞳から発せられる視線は極寒。それだけ見ればいつも通りで、疲労の色はない。しかし彼女は今朝、30人も野盗団に不殺を貫いたまま勝つという難行を果たしたばかりだ。疲れていないはずがない。しかし、まさか本当に疲れていないのだろうか？

「お疲れではないのですか？」

「……………問題ない。……………今夜、受ける」

シズは平然と答え、あくまでも今夜受けることを望んだ。事実、彼女は疲労していない。自動人形オートマトンのモンスター能力の一つに疲労無効があるからだ。彼女は何時間でも狙撃体勢のまま待機できるし、何時間でも対象を追跡できる。

イシュペンはその態度に絶対の自信を感じ、彼女のタフネスを信じることにした。

「わかりました。手続きをしておきます」

「……………ありがとう」

それを終えてようやくシズはいつもの安宿に帰った。

冒険者組合と同じようなウエスタンドアをくぐると、がやがやと騒がしかった店内は

一斉に静まり返る。そしてテーブルについている冒険者達は明らかな畏怖の視線を彼女に向け、ひそひそと話し始めた。30人潰し、野盗団潰しといった囁きを彼女の優れた聴覚が捕らえる。先に帰っていたブリタが街道のできごとを話したのだろうとシズは思った。

そして、その店内の変化に気付いた店主とブリタがシズに声をかけてくる。

「おう、帰ったか」

「おかえり」

「……………ただいま。……………お腹空いた」

「待ってろ。いま持ってきてやる」

そう言って店主は奥の厨房へ入っていく。シズはブリタが一人で座っているテーブルに近付き、椅子を引いて相席することにした。

「何してたの？」

「……………昇格試験の手続き」

「ああ、あんたの実力なら銅はカッパおかしいもんね。いつ受けるの？」

「……………今夜」

「……………急ぎすぎじゃない？」

ブリタはシズが焦っているのではないかと心配になった。たしかに一人で見知らぬ

土地に放り出されて心細いのは分かる。だが、だからといって午前中にあれだけの大立ち回りをした夜に大事な昇格試験を受けるのは急ぎすぎだ。そもそも冒険者登録をしたのは昨日だと言うのに。

「……………ランクが上がれば、有名になる……………見つけてもらえるかもしれない」

「だからって……………疲れてないの？」

「……………平気」

ブリタはシズを観察するが、たしかに疲れた様子は見られない。いつもの無表情に、いつもの極寒の視線だ。それに、あの戦いでも息一つ荒げていなかったような気がする。

「まあ……………あなたなら大丈夫かもしれないけどさ。少しでもまずいかなと思ったらすぐに引くんだよ？冒険者達の間じゃ『まだ行けるはもう危ない』って言葉が言い伝えられてるんだから」

「……………わかった」

シズは先輩冒険者から教えられた冒険者の言い伝えを素直に受け入れた。先人の教えは守るべきだ。守らなかったものは先人として言葉を残すこともできずに消えていったのだから。

そこへ店主がボトルと皿を持って来る。皿からは食欲をくすぐるいい匂いが漂って

いた。

「お待ちどうさん」

「……………ありがとう」

シズは遅めの昼食として空きっ腹に火がつくような蒸留酒を一気に流し込み、口直しに野菜抜きスープをゆっくりと味わった。やはり専用ドリンクが最も美味しいと思うが、今の自分の心には必要な味だった。

食事が終わるまで待つてくれていたブリタから墓地に出るモンスターを聞き出し、お礼として銀貨を一枚渡す。そして人間のふりをするために自分のベッドに潜り込み、夕方待つ。自分しかない昼間の大部屋はいやに静かだった。

そして日が沈みかけ、空が赤からオレンジ、エメラルドグリーンを経て紺色へと変わろうとする夕方。左手にカントラ、右手に大振りなナイフを持ったシズは共同墓地の門を潜り、昇格試験を開始した。

誰もいない墓地を歩く、歩く、歩く。遠くで何かの鳴き声が聞こえる。たまに人影が見えたと思ったらスケルトンだったのでナイフの腹で殴り倒し、証明部位を回収する。

そうして歩き続けて数十分後、シズは共同墓地の奥にある大きな霊廟の前でぼうつと立ち止まっていた。

霊廟。ナザリック地下大墳墓のそれとは大きさも格式も比べ物にならないが、どうしても思い出してしまおう。

ユリ姉は心配していいのだろうか？ルプスレギナは悪戯いたずらをしていいのだろうか？ナーベラルは人間嫌いのままだろうか？ソリュシャンはあの趣味のままだろうか？エントマはいい加減妹だと認めるだろうか？セバス様は私が急にいなくなつて怒っていないだろうか？あのかわいいエクレアは今日も下克上を語っているのだろうか？

……そして何より、最後まで残られた至高の御方。我らナザリックの全存在にとつて最後の、唯一の存在意義。モモンガ様はお元氣だろうか？

ふいに、聴覚センサーがシズを感傷から引き戻す。足音だ。恐らく女。しかし明らか
に鍛えられている。たつた一人で夜中の墓地にやってくる時点で既に怪しい。シズは
念のために自らの小さな体を大きめの墓石に隠した。さらに創造主から頂いたマフ
ラーで不可視化を発動する。そして自動人形オートマトンの特性で微動だにすることなく待ち続け
た。

来た。茶色いフード付きのマントを被つた短い金髪の女だ。何が楽しいのか、顔には
軽薄な笑みが張り付いている。

「あれー？たしかここに隠れたと思うんだけどなー？」

彼女は間延びした声を出しながらある墓石の裏、シズが不可視化を発動した場所を見つめている。

「うーん、勘違いかあー」

そういつてフードの女は通り過ぎようとし——、シズが隠れた位置へ何かを投擲する。音を立てて深々と刺さったそれはステイレットと呼ばれる刺突剣の一種だった。どう見ても刃の根元まで刺さっており、人間ならば致命傷であることは明らかだ。

「……見間違い？」

彼女は急に真面目な口調になると墓石の裏まで歩き、地面に刺さったステイレットを回収した。

「……………」

そのステイレットには血も布切れもついていない。無言でそれを観察していた彼女は諦めたかのようにそれを懐にしまい、マントの下のプレートを手で撫でた。

そして霊廟へ向かって足を踏み出すと、地面に口づけをしていた。

(おっ)

何が起こったか分からないという顔で立ち上がろうとするが、左腕を何者かに捻り上げられて地面に押さえつけられた。そしてその何者かにマントを剥ぎ取られ、その下の

プレートが露になる。その色は銅、鉄、銀、金、白金、ミスリル、オリハルコン。すなわちアダマンタイトを除いた全てだった。何十枚もの冒険者プレートが軽装の革鎧に隙間なく貼り付けられていたのだ。

(さっきのやつか!? 今までどこに隠れてやがった!?)

彼女は先ほどのランタンの持ち主が自分を押さえつけているのだと思い振りほどこうとするが、びくともしない。なので首と目を限界まで動かして正体を見ようとするが、捻り上げられた自分の腕と無数の星が輝く空が見えるだけだ。

(不可視化? なら魔法詠唱者……いや私を押さえ込めるほどの力を持った魔法詠唱者なんてありえない。ならマジックアイテムか! クソツツ! 誰だ!? 漆黒聖典か!?)

自分がかつて所属し、そして裏切った組織の一人が自分を捕らえに来たのかと思つたが、彼女の背中から聞こえてきたのは聞いたことがない少女の声だった。

「……………あなたは、誰?」

「…………あれれ? 人に名前を聞くときは自分からつてお父さんとお母さんに教えられなかったのかな?」

自分に対して誰かと聞いてきた時点で漆黒聖典はありえない。ならば誰かと思ひ、自分の情報を出さずに相手の情報を引き出そうとする。すると自分の質問が聞こえていなかったのかと思うほど同じ抑揚で同じ質問が返つて来た。

「……………あなたは、誰？」

「……………私はミレーヌ。あなたは？」

「……………」

埴が明かないと考えて偽名を答えつつ相手の名を尋ねるが、帰ってきたのは沈黙。

こいつは一体誰だ？と疑問が湧き上がる。自分と『まともな戦闘になる』のは周辺国で5人だけ。ガゼフ・ストロノーフ、ブレイン・アングラウス、青の薔薇のガガーラン、朱の雫のルイセンベルグ・アルベリオン、引退したアダマンタイト級冒険者のヴェスチャー・クロフ・デイ・ローファン。こいつらならば速度特化の私をpushし込めるだろう。だが、誰一人として少女ではない。もしかしたらマジックアイテムで声を変えているのかも知れないが、そんなことをしてこんな所にいた理由が分からない。

「……………このプレートは、何？」

「これはねー、冒険者プレートって言ってすごい冒険者は沢山身につけられるんだー」

「……………そうなの？」

「そうだよー」

誰でも分かるような嘘をついてみるが、返ってきたのは初めて知ったと言わんばかりの反応。

（マジで誰だ？こんな物知らずで女のガキみたいな声をして私を超える筋力……………まさ

か、モンスター?)

ナーガなどの一部のモンスターは透明化能力を持っている。なんでそんなモンスターが人気のない墓地とは言え都市の中にいるのか分からないが、最も可能性が高いように思える。

(いや、でも不可視化なら私はステイレットを避けた時の音で分かるはず……クソッ、何がどうなってやがる!?!カジツちゃんに会いに来ただけで何でこうなる!?)

プレートを何十枚も身につけた女は混乱の極地にいた。しかし彼女の左腕を捻り上げて地面に押さえつけている存在、不可視化中のシズ・デルタもまた混乱していた。

(……………冒険者のランクは銅^{カッパー}級、鉄^{アイアン}級、銀^{シルバー}級、金^{ゴールド}級、白金^{プラチナ}級、ミスリル級、オリハルコン級、アダマンタイト級の8つ。……………冒険者のクラスはプレートで分かれる。

……………高位の冒険者はプレートを沢山付けられると言う話は聞いたことがない)

シズはこの世界に来てまだ二日目の夜である。この世界に対する常識と言うものが決定的に欠けていることを自覚していたし、このもがいている女が自分がいたところに攻撃してきたのも理由があるのかもしれないと思っていた。

ステイレットを投擲されたときは、思わずマフラーの不可知化で姿も音も臭いも振動も隠したうえで回避した。だが、このマフラーの不可知化は不可視化と違って短時間しか発動できない。

自分を攻撃してきた女の実力は油断できないほど高いと感じたし、もし不可知化の間が切れた後に感知されて戦闘になった場合は無傷ではすまないと確信できた。ゆえに不可知化の発動時間中に足払いをかけて背後から拘束したのだ。

しかし、シズは今頃になってこの女性が高位の冒険者であり、自分と同じように何らかの仕事のために来たのではないかと思っていた。

「……………あなたは……………本当に冒険者？」

「そうだよー？」

「……………なぜ……………攻撃した？」

「こんな墓場に怪しい人影が見えたから悪い人かと思っただよー」

「……………あなたは……………悪人ではない？」

「悪人じゃないよー」

ミレーヌと名乗った女は内心（私は悪人だよバーカ）と思いながらも平然と嘘をついた。魔法やマジックアイテムの中には嘘を見分けるものや表面的な思考を読むものもあるが、シズは習得も所持もしていない。だから彼女は自分の直感を信じるしかなかった。

「ねー、そろそろ離してくれないー？」

「……………駄目……………信用できない」

「ああ、そう。なら………喰らいな!!」

そう言つて彼女は自由な右腕で、ステイレットの一本を『地面に突き刺した』。瞬間、直径数メートルの《ファイヤーボール火球》が二人を包む。シズは未知の現象に驚き、思わず手を離して後ろへ飛び退いた。

ユグドラシルでは魔力を込めれば衝撃波を発生させる武器や炎属性を纏つた武器を創ることはできるが、魔法そのものを発動できる武器なんてものは存在しない。ゆえにここをユグドラシルの『しよしんしゃえりあ』だと思つていたシズは驚きのあまり飛び退いてしまったのだ。

オートマトン自動人形である彼女は即座に現状を確認する。自分のダメージはそれほどではない。だが拘束を解いてしまった。そして先ほど自爆によつて自由になつた女が、自分に匹敵する速度で『自分の目に向けて真つ直ぐ』ステイレットを刺し込もうとしている。

激しい金属音が鳴る。背を逸らしながら間に大振りなナイフを挟んだことで何とか防ぐことができたが、その刺突を繰り出してきた相手は両手にステイレットを握つて連続で攻め立ててくる。

最初の一撃よりも若干速度が落ちたそれらをシズは何とかナイフ一本で捌ききる。相手の狙いは時々デタラメなこともあるが、それがかえつて予測できない攻撃として彼女を苦しめる。

距離を離そうと後退すれば的確に距離を詰められ、右に逃げようとしても左に逃げようとしても彼女が動いたただけ狙いも動く。

「……………見えてる？」

「見えてるよー？意外とちっちゃいんだねー？」

まさか見えているのかと思つて問いかけるとステイレットの女はシズの身長のことまで言い当ててきた。

（……………違う。……………見えているのではなく、『聞こえている』。……………最初の一撃が目を狙ったのは偶然だけど、防いだ音でナイフの角度を知った。……………そこから私が背を逸らしたことも、私の肩の高さも知った。……………今も足音やナイフの角度から位置を特定している）

シズは狙いが時々デタラメであること、そして決して距離を離さず軽くて速い攻撃を繰り返していることから相手の感知方法を推測した。

「意外としぶといんだねー？そろそろ死んだらー？」

「……………」

シズは返事をしない。彼女の防御力はせいぜい20レベルの戦士職程度しかなく、相手の攻撃を一撃でもまともに受ければ致命傷となりえるからだ。答える余裕などない。

一方、優勢に見えるステイレットの女は内心で焦っていた。

(姿が見えない以上、ここで逃がせば常に狙われている可能性に怯え続けることになる。今は足音も聞こえてるが、墓石の裏から移動したときは明らかに音も遮断していた。ならここで殺すしかない！体格的に持久力は私のほうが上のはずだ！)

そして音が聞こえなければ達人が刺突の練習でもしているような光景に、唐突な終わりが訪れる。

胸に大穴が開いた。

「……………ふっ」

血の滴るそれが『背中へと』引き抜かれ、その女は倒れ伏す。

心臓から迸る返り血に塗れたのは、シズ・デルタだった。

「……………」

シズ・デルタの不可知化は短時間しか発動できない。だがそれは冷却時間を挟まなかった場合の話だ。彼女は不可知化が再使用できる時間になるまで耐え切り、回り込んで背後からの一撃によって止めを刺したのだ。

「……………ミレーヌさん……安らかに」

こうして、自らの趣味嗜好のために何十人もの冒険者を狩り殺した女は、本名を知れることもなく——死んだ。

続く。

シズちゃん馬車馬を載せた馬車を牽く話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△。通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女は鉄アイアン級への昇格試験の最中に怪しい人物に襲われ、この世界に来て初めての殺人に手を染めた。されど、それは手加減する余裕などなかった死闘の果ての決着である。

そんな彼女は今、馬車馬を載せた馬車を牽いて馬車馬より速く駆けていた。

ことの始まりはミレーヌと名乗った女の死を共同墓地の衛兵に報告したところまで遡る。

まず初めての殺人をなしたシズは現場保存のために死体にはそれ以上触らず、自身の出せる最高速で共同墓地の衛兵がいるところまで駆けて行った。長く放置すればアンデッドに荒らされたりするかもしれないと思っただからだ。また彼女は知らなかったが、この世界では死体を放置しすぎると自然にアンデッドになるという現象が起こる。彼女の判断は正解だった。

だが、その姿を見た衛兵達は仰天した。つい数十分前に昇格試験へ出かけていった

銅^{カッパ}級冒険者が全身血塗れで帰ってきたのだ。衛兵隊長は慌てて備蓄のポーションを与えようとしたが、彼女の人を殺した返り血だという発言に再度仰天した。

そして大慌てで衛兵達を率いて現場に急行してみれば、たしかに何十枚もの冒険者プレート^{カッパ}を軽装の革鎧に貼り付けた女が死んでいたのである。夜中であるために現場の詳細な調査は翌朝に持ち越されたが、とりあえず死体と所持品をできるだけ回収して衛兵詰所に運び込んだのだった。

衛兵達は都市長や冒険者組合長、所持品鑑定に関して魔術師組合長などの関係責任者を夜中に叩き起こして第一報を伝えた。

そして早朝、現場検証が行われたのである。

まず、瘦せた体にゆったりとした服を纏った魔術師組合長、テオ・ラケシルが現場の焼け跡と武器に言及した。

「なるほど、たしかにこの焼け跡は《火球》^{ファイヤーボール}によるものだな。ステイレットには一本を除いて《魔法蓄積》^{マジックアキュムレート}で《電撃》^{ライトニング}や《人間種魅了》^{チャームパッション}などの様々な魔法が込められていた。これは空のステイレットから発動されたと見て間違いないだろう」

それに対して屈強な体つきが一目で分かる冒険者組合長、プルトン・アインザックが革鎧の冒険者プレートについて説明する。

「革鎧に貼り付けられていたプレートは全て本物の冒険者プレートだった。どれもここ数年の間に行方不明になった冒険者のものばかりだ。比率としては銅が最も多かったが、中にはエ・ランテルにはいないオリハルコンすらあったよ……。あの女が殺して奪ったと見て、間違いないだろう」

彼は殺された冒険者を悼むように顔をしかめた。

二人の発言を聞くのは太ったブルドッグが貴族の服を着たような都市長、パナソレイ・グルーゼ・デイ・レッテンマイアだ。彼は普段の愚鈍なふりを止めて真剣な口調で尋ねる。

「それで、このミレーヌとかいう大量殺人鬼は一体何者なのかね？オリハルコン級を狩り殺せるほどの実力者が、今まで無名だったというのは考えられないだろう」

ラケシルとアインザックは顔を見合わせ、互いの考えを察したのか頷きあった。そしてレッテンマイアに同じ見解を述べる。

「おそらくはスレイン法国の特殊部隊、六色聖典のいずれかに属する隊員だと思われる。かの部隊は周辺国ではありえないほどの戦力を持っているとか」

「私もラケシルと同意見です。それに、ラケシル。あれについて言っていないだろう」

アインザックの言葉に、ラケシルは眉間に深いしわを寄せて険しい目つきになった。レッテンマイアはその様子を訝しげに見つめ、これ以上の厄介ごとかと痛む気がする胃

をさすった。

「都市長、これは下のものには伝えなくて頂きたいのですが……、『装備者の自我を消して《魔法上昇^{オーバーマジック}》を使う媒体へ変える』というサークレットが見つかりました。間違いなく国宝級の品です」

その説明にレッテンマイアは目を剥いた。装備者の自我を消すなど、明らかに呪いのアイテムとしか言いようがないではないか。

「待ちたまえ。なぜそんな呪いのアイテムが国宝で、スレイン法国と関係があるというのだね？」

「それはこのアイテムの適合者はおそらく100万人に1人しかないだろうからです。そんな人間を探し出せるのは、全国民に住民台帳を付けているスレイン法国くらいでしょう。そしてかの国はよく大儀式を行うとも聞きます。このアイテムがその大儀式の媒体として使われているとすれば……全て辻褄が合います」

レッテンマイアは絶句した。このような、国家機密に関わる国宝など外交問題にしかない。ここで揉み消して『なかつたこと』にするべきだという考えが頭をよぎる。だが、その考えに身を委ねるには彼は王への忠誠心が強過ぎた。彼は苦虫を噛み潰したような顔で決断する。

「……………これは、国王陛下へ報告する。各自、くれぐれも情報を漏らさないでくれたま

え。……最悪、我々が『消される』可能性すらある」

三人は極めて深刻な顔で頷きあい、その場を解散した。

そして結局、シズは外交問題を引き起こす機密を知ることなく解放されたのだった。

その後、冒険者組合に現れたシズを迎えたのは明らかな畏敬の眼差しだった。怪力酒豪。野盗団潰し。冒険者殺しを殺した女。そんなあだ名が口々に囁かれる。シズはそれらを無表情で受け止め、受付で白金ブラチナのプレートを受け取る。

銀シルバー級に匹敵すると思われる野盗団30人を殺さずに倒した時点で、その実力は白金ブラチナ級を超えると見なされた。そして今回の冒険者殺し討伐で、下手をすればアダマンタイト級に準ずる實力を持つと評価されていた。

しかし、冒険者のランクというのは『功績』によって決まるものである。たしかに街の重要人物であるバルド・ロフーレ氏を助け、何十人も冒険者の敵を討ったのは事実だ。だが街の危機を救ったりしたわけではないし、強大なモンスターを討伐した訳でもない。

何よりこの街の上層部が、スレイン法国との外交問題に発展しかねない冒険者殺し討伐を大事にしたがらなかったというのがある。

ゆえに新人冒険者シズ・デルタは、銅カッパー級から白金ブラチナ級への最速昇格記録を更新するに

留まったのであった。

仕事を請けようと組合にやってきた漆黒の剣は、シズの首元に輝く白金のプレートブラチナを見て彼女を祝ってくれた。初めはルクルットだった。

「おつめでどうシズちゃん！あつという間に追い越されちゃったな……けど、まだまだ分からないことが多いだろうし、変わらず何でも聞いてくれよ！例えば恋愛の実戦訓練とか！」

「……………うん、恋愛以外でよろしく」

「……………だよな」

項垂れるルクルットを見た彼の仲間はず苦笑いをした。

しかし事実として、彼女には分からないことが多い。冒険者はプレートを何枚もつけたりしないということを知っていれば昨夜死闘を演じることもなかったのだ。だから恋愛以外のことはほとんど聞こうとシズは思った。

次いでホテルブラチナがお祝いと共に忠告をしてくれる。

「シズさん、白金級昇格おめでとうございます！……しかし、急にランクが上がれば反感を覚える人は必ず現れます。そういった人たちを上手く捌くことがこれからは必要になっってくるでしょう」

「……………ありがとう、気をつける」

「はい、気をつけてください。でも、忘れないでください。私達漆黒の剣はあなたの味方です。私達だけではありません。シズさんが思っている以上に、シズさんの味方は沢山います」

「……………そう?」

「ええ、そうです」

シズは考える。今まではルクルットを初めとして自分の外見という『創造主に与えられしもの』によって人に好かれていると思っていた。しかし、ペテルが言っているのはそういうことではない気がする。

そしてダインはいつもの口調だった。

「おめでとうシズ殿! たった一日で白金級プラチナになるとは驚きである!」

「……………ありがとう。でも一日じゃない。登録は一昨日」

「一昨日は帰って冒険者達を酔い潰しただけで、実質的には一日である!」

「……………そう?」

「そうである!」

ダインの言うことも尤もかも知れないとシズは思った。例え実質的もつとという言葉が頭につこうと、通りがいい名乗り方をしたほうが良いのではなからうかと。

最後にニニヤが少し興奮して話しかける。

「おめでとうございます！さすがはシズさんですね！最速記録ですよ！」

「……………ありがとうございます、頑張った。…………お姉さん、ナザリックのついでだけど、探す」

「……………覚えていてくれたんですね」

「……………姉妹は、一緒にいい。…………私も姉妹がいる」

「そうなんですか!?!…………シズさんも、姉妹に会えるといいですね」

姉妹は一緒にいたほうが良いに決まっている。…………私も、いずれ姉妹がいるナザリックに帰ってみせる。シズはそう決意を改めた。

漆黒の剣の後に、同じくやってきていたブリタも彼女に祝いの言葉をかける。しかしブリタの胸中は少し複雑だった。

正直、嫉妬があるのだ。こんなに強くて、こんなに可愛くて、こんなに自由なのだから。だが、それでも自分はこのシズ・デルタという一生懸命な少女を応援したくなっていた。これが人望というやつなのだろうか。

「おめでとう！なんだか、すごくあだ名が増えてるわね」

「……………ありがとう…………有名になれた？」

「ええ、このエラントルで今あなた以上に有名な白金級ブラチナ冒険者なんていないわ。…………ナザリック、だっけ？帰れるといいわね」

「……………うん、帰る……………どれだけかかっても、何をしても」

シズは相変わらずの無表情で、自身の最終目的にして最優先事項を語る。彼女は決意を口にするので、改めて自身の帰還の意志を確かめた。自らの存在意義にして存在意志、『至高の御方々に仕えること』は変わっていない。たとえ一生かかろうと、帰るのだ。

しかし、シズは想像以上に彼らの祝いの言葉で素直に嬉しくなっていた。人間に祝われるなど、ナザリツクにいたときには想像もしなかったことだった。だが、シズは自然とそれを受け入れられた。これも創造主が自分に与えられたカルマ値の影響だろうか？と彼女は思う。

その後、六人は漆黒の剣が利用している、そしてこれからシズも利用することになる。中級の冒険者向けの宿で昼食を取っていた。

シズの白金級昇格ブラチナとバルド・ロフールから謝礼を受け取ったことを兼ねたお祝いである。バルドは「昨日は後始末に奔走していたせいで謝礼が遅れて申し訳ない」と謝り、彼らに謝礼を渡した。その額はシズに金貨50枚、漆黒の剣とブリタに一人あたり金貨10枚、合計金貨100枚である。

これに最も喜んだのはブリタである。なにせ生命と自由と尊厳を奪われる恐怖を味わったとは言え、昨日まで生活費も娯楽費も切り詰めに切り詰めてやっと買った金貨1

枚と銀貨10枚のポーションを眺めてにやにやしていたところに金貨10枚の臨時収入である。喜ばないわけがなかった。

次に喜んだのはシズである。300日分以上の酒代を初仕事で手に入れられたのだ。これでナザリックを探す時間が取れると思いいいに喜んだ。顔は相変わらずの無表情であるが、足取りが軽かったり手の振りが大きかったりと、仕草の一つ一つに嬉しさが滲み出ていた。

そして漆黒の剣も一人金貨10枚という大金に喜んだが、それ以上にバルドからの「馬車の中にも聞こえた土壇場の声から、あなた方は信用できると確信しました。これからは銀^{シルバー}級以下の指名依頼はあなたがたを選ばせて頂きます」という約束に最も喜んだ。指名依頼は冒険者のステータスなのだ。もちろん所詮は書類を認め^{した}たわけでもない口約束でしかない。しかしバルドが彼らを信じたように、彼らもバルドを信じたのだ。

そして彼ら、主にブリタは臨時収入の使い道について話し出す。

「これだけあれば鎧も武器もマジックアイテムも買える！何買おうかなー！」
「ブリタさん嬉しそうですね」

ペテルが見るからに浮かれているブリタに苦笑いする。

「だって金貨10枚よ!?!あたしが今持つてるポーション6本買ってもまだ余るのよ!?!」

「あんまり大声で金額は口にしないほうがいいですよ……」
「あつと、それもそうね」

ペテルの忠告でブリタは口に手を当てて少し静かになる。それでも相変わらずうきうきとした雰囲気が身振り手振りから伝わってきていた。ふと、彼女は今回最も多くの報酬を得たシズに使い道を探ねる。

「そういうシズって謝礼、何に使うの？」

「……………酒代」

「いや、それ以外でさ。例えばポーシヨンとか買わないの？」

「……………あの、青いの？」

「そう、この青いの」

そう言つてブリタは懐に大事にしまつていた金貨1枚と銀貨10枚の青いポーシヨンを取り出した。昨日は使うかと思つていたが結局シズのおかげで使わなかつた。しかしブリタはこのポーシヨンがあつたおかげで助かつたのではないかと思ひ、まるでお守りのように感じていた。

事実、ブリタがポーシヨンを眺めていなければシズの面倒を見ることもシズと一緒に仕事をすることもなく、いつかあの野盗団への偵察に失敗して死んでいた可能性は高い。不幸に見舞われるが、その中で不幸を超える幸運を掴み取る。ブリタという女の人

生はそういうものだった。

ちなみにシズの記憶ではポーションとは赤いものだったが、『しよしんしゃえりあ』では青いのだろうと一人納得していた。

「……………要らない」

「まあ、あんたは強いから要らないかもしれないけど、仲間も同じくらい強い訳じゃないだろうから怪我くらいするじゃない？」

「……………」

シズは考え込むようにその美しい曲線の顎にまだら緑のグローブを当てた。
オートマトン自動人形シズ・デルタがポーションを要らないと言ったのは、怪我をしない自信があるからではない。単純に効かないからだ。
オートマトン自動人形はホームクルス人造人間より厳しい飲食ペナルティを抱えておきながら、ゴレム動像のようにポーションや治癒魔法などの正属性エネルギーによる回復が効かないのである。

オートマトン自動人形のHPを回復できるのは通常、体内のナノマシンによる自動回復か《リペア修復》などの対物修理魔法だけだ。ちなみに修復は対象の耐久限界を若干下げるが、オートマトン自動人形に使った場合は最大HPが下がるなどの弊害はない。

しかし、シズはいま人間のふりをすることで食事にありつけている。もしも人間ではないと知られてしまえば街を追い出される可能性もある。その可能性が実現した場合、

彼女に待ち受けるのは餓死だ。

ゆえに彼女は人間のふりを続けるためにポーシオンを買う必要があると判断した。なにせブリタのような普通の鉄^{アイアン}級冒険者ですら持っているのだ。現時点で白金^{プラチナ}級のシズが持つていないのは明らかに不自然だろう。

「……………買う」

「そう。ならエ・ランテルで一番いい薬師の店まで案内してあげる。……まあ、私も行ったことはないんだけどね」

なお、ブリタは普通の鉄^{アイアン}級ではない。普通の鉄^{アイアン}級は諸々を切り詰めて金貨一枚と銀貨10枚もするポーシオンを買うほどの自制心など持つていない。これは完全にシズの勘違いである。

その後も、あれを買おうあそこに行こうと楽しげに話し合う彼らにシズは静かに相槌を打つのだった。ちなみに、周りの宿泊客は彼女に驚愕の視線を向けていた。彼らが彼女の食生活を見慣れるのはもう少しかかるだろう。

午後。シズはブリタに案内されて、少し迷いながらもエ・ランテル一番の薬師の店『バレアレ薬品店』に辿り着いた。二人が店内に入ると、そこは薬草と思しき草や何かよく分からない薬品の匂いに満ちた空間だった。

梯子で柵を整理していた人物が二人の入店に気付くと、梯子を降りて接客に來た。彼はシズより頭一個分ほど背が高い少年だったが、前髪が長くて顔はよく見えず、ボロボロの作業着は植物の汁と思しき染みが酷く臭った。

「いらつしやいませ。何のご用件でしょうか？」

その声は高く、身長と合わせて男になりきる前の成長期の少年だと分かる。

「ンファイレア・バレアレさん、で合ってるわよね？」

「はい。ンファイレア・バレアレです」

「良かった。店は間違つてないみたいね。実はこの子がポーションをかうんだけど、一番売れてるのってどれ？」

「それでしたら第二位階の魔法のみで作ったポーションですね。金貨8枚になります」

「……私でも買えるわね」

「え？」

ンファイレアはブリタのプレートを見る。それは鉄アイアンであり、金貨を8枚も持っている冒険者のものではない。その視線に気付いた彼女は胸の前で両手を振って答える。

「あ、ああ！ちよつと臨時収入があったのよ！それよりシズ！第二位階の、買う？」

「……………買う」

「お買い上げありがとうございます。……もしかして、野盗団潰しのシズさんですか？」

彼はシズという名前と白金プラチナのプレートから、昨日起きたという大捕り物のことを思い出して尋ねた。

「……………うん」

「本当に小さな女の子なんですわね……。あ、いえ、侮っている訳ではないんです。ただ、本当に冒険者は見かけによらないんだなと思ひまして」

「まあ、シズは冒険者の中でも特別だと思っけどね。なんたってオリハルコン級でも勝てなかった冒険者殺しを倒したんだから」

「それは、すごいですね……………」

ブリタはまるで自分のことのように自慢げに言った。何だかんだでシズが褒められるのは嬉しいのだ。ンフィーレアはその話を初めて知ったのか、驚いた様子で前髪の隙間からシズを見ていた。

このンフィーレアと出会いがシズを次の戦いへと導く。

翌朝。シズはミスリル級への昇格試験を受けるために冒険者組合にいた。彼女としては一刻も早くアダマンタイト級まで上がり、自身の名を世界中に広める必要があるのだ。全てはナザリックへ帰還するために。

と、そこへ一人の少年が血相を変えて駆け込んでくる。昨日バレアレ薬品店で出会っ

た薬師、ンファイレア・バレアレだ。

「だ、誰か……！あ、シズさん！来てください！あなたなら一人でも十分です！」

「……………なぜ？」

「今すぐカルネ村へ向かわなければなりません！今朝、帝国の騎士に村を焼き払われたつていう人たちが護送されてきて！もしかしたら帝国に近いカルネ村も危ないかも知れないんです！」

シズは相変わらずの無表情でじつとンファイレアを見つめる。彼女はカルネ村のことなど知らないし、なぜ彼がカルネ村にこだわっているのかも知らない。だが、その必死さが何らかの『善い』衝動によるものだと思えば彼女には分かった。ゆえに彼女は自らのカールマ値に突き動かされるように承諾した。

ナザリツクに帰らなければならない。だがそれは創造主が自らに与えたもうた『シズ・デルタという形』を維持した上での話だ。

「……………わかった。行く」

「ありがとうございます！こっちはです！」

ンファイレアは彼女の手を引き大急ぎで外へ連れ出した。そこには一台の簡素な荷馬車が止めてあり、彼はその馬車に乗り込むと急いで馬を走らせようとした。しかし、シズはその馬と荷馬車を繋ぐ馬具を外しだした。

「何をしているんですか!？」

「……………私が牽いたほうが速い」

シズはそう言うや否や馬具を外した馬車馬を馬車に乗せ、積んであつたロープで固定した。そして馬が牽いていた木の棒を掴み、ストロベリーフロンド赤金の豊かな髪を靡かせて疾風のよ
うに駆け出した。

そして冒頭へ至る。

不運な小鬼を撥ね飛ばし、群れる人食い大鬼を怯えさせ、彼女は休みもせず駆け抜けた。そうしてエ・ランテル発カルネ村行きオートマトンの自動人形馬車、シズ・デルタ便は早朝に出る夜頃に辿り着けるはずの距離を1時間で走破したのだった。

続く。

シズちゃんが周りにドン引きされる話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△。通称シズ・デルタ。

彼女は自動人形として創られ、基本的に合理的な思考で動くように『設定』されている。だが、人間の思考は非合理的な部分も多い。ゆえに彼女の思考は常に賛同される訳ではないのだ。

そんな彼女は今、周りにドン引きされていた。

ことの始まりはカルネ村に到着したときまで遡る。

カルネ村に一行が着いたとき、そこは狩り場だった。頑丈な鉄の鎧を身に纏った騎士たちが無手の村人達を追いかけ回しては冷たい剣を刺していく。妻子を守ろうと抵抗した父親は何度も貫かれ、わが身を挺して子供を守ろうとした母親は首を刎ねられた。

その光景を見たンファイレアはシズにこのまま村へ突入することを頼む。

「シズさん！このまま突っ込んでください！騎士の注意を引き付けます！」

「……………了解」

シズは時速50キロメートル近い速度で呐喊し、ンファイレアは荷台に掴まりながら

魔法を放つ。

「《酸アシッドアローの矢》！」

彼の指先から飛び出した酸の矢が騎士達の鎧を溶かし、その隙間から酸が入ったらしく騎士が悲鳴を上げながら転がりまわる。周りの騎士達は仲間をやられたことに激怒した様子で一斉にシズ達を追いかけだした。

「次の分かれ道を左へ！」

「……………左折、了解」

シズは騎士達を森へ誘導しようとしていた。森の中ならば大勢が一人に斬りかかり難にくくなる。シズが騎士達を倒すのが少しでも楽になるはずだ。そういう計算で彼は動いていた。

そして、森のほうへ向かったのはもう一つ理由がある。その方向に、最も助けたい女性がいるのだ。エンリ・エモット。彼女の家は村の中でも森側に近かった。もしもどこかへ逃げ出そうとするならば森の中を目指すはずだと彼は判断していた。

そして彼らが森へと続く一本道に出たとき、彼はそれを見つけた。最も守りたい女性アシッドアローが、最も愛している女性が、騎士の凶刃に倒れようとしているのを。だがこの位置では《酸の矢》は彼女にも被害が及んでしまう。ゆえに――。

「シズさん！ 『僕を投げて！』」

「……………幸運を」

彼は自身に《リーンフォース・アーマー鎧 強化》をかけると、シズに投げられ硬い金属鎧を纏った騎士へ肩からぶつかつた。肉が金属に叩きつけられる音がする。彼は体勢を崩した騎士を地面に押さえつけるが、魔法で防御力を強化したとは言え生身で鉄の塊に衝突して痛くないわけがない。だが彼は自身の痛みなどどうでもいいと言わんばかりに叫んだ。

「エンリ！逃げて！」

「ンファイレーア!?!」

エンリは驚愕した。騎士に追い詰められ、ただでやられてなるものかと硬い鉄の兜を拳が碎けるほど殴りつけた。だがその行為は騎士を逆上させ、背中を切りつけられる結果にしかならなかつた。もう自分は死ぬ。せめて妹だけでも助けたい。そう考えた瞬間に彼が現れたのだ。

下敷きになつた騎士は激昂し、単純な力の差でンファイレーアを跳ね飛ばした。そして血に塗れた剣で彼を突き殺そうとした。だが――。

「《アシッドアロー酸の矢》！」

再詠唱時間が間に合つた魔法が兜の隙間に当たり、その奥の目を焼き潰す。騎士はたまらず絶叫し、剣も捨てて逃げ出した。

兜から跳ねた酸がンファイレーアの肌を焦がす。だが彼は声一つ上げずにエンリに歩

み寄った。彼は懐からポーションを取り出し、彼女に差し出す。

「これを飲んで、エンリ」

「ンファイレア、どうして……」

「そんなことはいいんだ。いまは、君の傷を癒したい」

火傷だらけにも関わらず優しい声をかける彼に、思わずなぜここにいいのかと問う。

だが彼はそんなことよりも私の傷を癒したいと語った。

エンリは気付いた。彼は、ンファイレアは私を助けるために来てくれたのだと。彼女の心臓が大きく跳ねる。今まで友人だと思っていなかった彼がやけに男らしく見えた。

「エンリ、僕の恋人になって欲しい。君が好きだ」

「……はい！」

ンファイレアは戦場の高揚の中で、平穏な日常や好きな人の命など容易に失われるものだと理解した。ゆえに彼は何をしてでもそれらを守り抜くという覚悟を抱いたのだ。

ちなみに、その背景でシズが追いついた騎士達をナイフ一振りで蹴散らしている。二人の邪魔をするものは当分現れそうになかった。

高く昇った日の下で、素朴な葬儀が行われている。あその後で騎士達はシズに追い散ら

されたが、それまでに失われた多くの命は戻ってはこなかった。その中には、エンリ・エモットの両親もいる。彼女は父母の亡骸に寄り掛かって泣いていた。

ンファイレアは彼女に寄り添い、手を握る。騎士を追い払い傷を癒した。だが、亡き人を蘇らせることはできない。彼は自らにできることは彼女の傍にいただけだと言わんばかりに、ただ強く彼女の手を握った。

ンファイレアはエンリの傍にいたためにカルネ村に数日滞在することにした。ゆえに彼に雇われたシズも同じく留まることになる。そして彼女は彼からの追加依頼で、その怪力によって村の復興を手助けしたのだった。

嵐は去った。あとは踏まれた麦のように立ち上がろう。小さな体で盛んに人々を助けるシズを見て、村人達は悲しみを背負いながらも前を向いて生きていく決意をした。

だが、その決意を踏み躪るかのように新たな影が村に迫る。物見櫓ものみやぐらに登っていた村人が、新たな騎馬の一団がこの村に向かっていることを見つけたのだ。

村人達はンファイレアとシズに頼み込む。どうかもう一度村を救ってくれないかと。彼は快諾する。彼は愛する人と、その人が住む世界を守りにきたのだ。ならば彼に雇われている彼女にも異論はない。

そうして彼と彼女は待ち受ける。村の広間で謎の一団を。

そこに現れたのは装備が異なる傭兵のような一団だった。金がないゆえに揃わないというより、個々人が得手不得手に合わせて改造を施したような格好だ。そしてその先頭に出たのは黒髪黒目の屈強な男。彼は広場で二人を目にすると名乗りを上げた。

「私はリ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフである！王命により、村々を襲っている帝国の騎士を討伐するべく参った！君たちは村人か!?」

シズには王国戦士長というのが何かは分からない。国家の最高武官なのか一部隊の隊長に過ぎないのか。だが堂々と名乗りを上げるといふことはこの国では有名なのだろう。そう思い隣のンファイレアに目を向ける。

彼は彼女の視線に軽く頷き、王国戦士長に対して慇懃いんぎんに応じる。

「私はエ・ランテルの薬師、ンファイレア・バレアレです。隣の白金級冒険者シズ・デルタブラチさんを雇い、この村を帝国の騎士から救いました。大勢の死傷者が出ましたが、もう騎士達はいません」

王国戦士長はその言葉に目を剥くと馬を降り、二人の前で深く頭を下げた。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない！」

「……頭を上げてください、王国戦士長様。あなたがたは間に合いませんでしたが、私がカルネ村に来ようと思ったのは王国戦士団が村人をエ・ランテルまで護送したからなのです。今朝、東の村々が襲われていることを私は知り、大急ぎで彼女を雇って急行した

がゆえに間に合ったのです」

その言葉に戦士長は、否、ガゼフ・ストロノーフは驚いて顔を上げた。

「……そうか、私が部隊を分けて避難民の護送を優先したのは無駄ではなかったのだな……！」

ガゼフは自身の選択が結果的とはいえ帝国の騎士を退け、多くの犠牲を出しつつも一つの村を救うことができたのだと喜んだ。

だが、一つ疑問が残る。エ・ランテルからこの村までは歩けば早朝に出て夜中に着くか否かという距離がある。走りきれぬ距離でもない。一体彼らはどうやって今朝出立して間に合ったのだろうか、と。ガゼフがそのことを尋ねると、ンフィーレアは複雑な表情をして語った。

「実は、隣にいる彼女、シズさんが馬車から馬を外して自分で牽いてここまで駆けて来たのです」

その言葉にガゼフは仰天する。馬車を牽いてきたということはンフィーレアという少年を乗せてきたのだろう。人一人を乗せた馬車を休みもせず牽き続け、朝から夜までかかる距離を昼か夕方までに駆け抜けるなど五宝物がなければ自分ですらできない。その伝説の英雄が如き偉業を目の前の小さな少女が成したとはとても思えなかった。よく見ればその顔は人形のように整っており、ますます屈強さから遠いように思える。

「その容姿からは信じがたいが……それほど力があるというならたつた二人で帝国の騎士達を追い払ったのも納得できる」

得心が行ったように頷くガゼフを見ながら、ンフィーレアは馬車馬を馬車に載せて馬車馬より速く駆けて一時間で到着したなどという頭が痛くなるような話は黙っておこうと心に決めた。世の中には知らないほうがいいこともあるのだから。

そして王国戦士団が帝国騎士の残党を狩るために出立しようとした時、斥候がその知らせを届けた。この村を、魔法詠唱者^{マジックキャスター}の集団が囲んでいるという報^{ほう}である。

ガゼフはンフィーレアとシズを連れて村の外側に位置する家屋から様子を伺う。見れば羽の生えた白いモンスターを従えた白尽くめの集団が並んでいた。

「戦士長様、あれは？」

「あれは天使と呼ばれる召喚モンスターだ。通常のそれよりも強力な性質を持っている。そして装備も恐らくは金属糸を編み上げたもの。そんな魔法詠唱者^{マジックキャスター}をあれだけ揃えるとすると、噂に聞くスレイン法国の特殊部隊、六色聖典のいずれかだろう」

「……勝てますか？」

「……君達を彼らが襲う理由があるとは思えない。ならば、狙いは私だろう。間違いない、私を殺せるだけの戦力があるはずだ」

ガゼフは厳^{いかめ}しい顔つきで推測を述べた。だが、その目に絶望はない。それを見たンフィーレアが何か勝機があるのかと問う。それに答えるかのように、彼はシズへと向き合った。

「デルタ殿。私に雇われないか？あなたの存在は彼らの計算外だ」

「……………冒険者は国同士の争いに関わらないのが規則……………この村を救った時点でかなり苦しい」

「だろうな。だが、彼らは表向きは存在しない部隊だ。どんな被害を受けようと、表沙汰になることはない。……………どんな被害をもたらそうと表沙汰になることはない、ということも事実だがな」

彼はこうもタイミングよく包囲されたことから、帝国騎士はスレイン法国の偽装部隊ではないかと疑っていた。彼は政治や根回し、貴族的なことにとことん疎い。しかし、馬鹿ではない。武人としての思考回路はこの状況の裏にある戦術的な企みを正確に見抜いていた。

そしてシズは少し俯^{うつむ}き、その美しい顎にまだら緑のグローブを当てて六色聖典がもたらす被害を考える。彼らはガゼフ・ストロノーフ暗殺のために来ている。暗殺とは犯人が分からない殺しだ。では村の家屋から見える距離で包囲している彼らは村人を生かしておくだろうか？……………答えは否だ。断じて殺す。でなければ暗殺が成立しない。

そしてンファイレアの依頼は正確には『エンリ・エモットと村の救助』だ。対象が一人ならば馬車に乗せて逃げ切れるだろう。だが村人全員は不可能だ。ならばここで戦い、敵を撃滅するしかない。

「……………ンファイレア、いまま依頼内容に変更はない？」

「ええ、ありません。救ってください。僕の愛する人と、その世界を」

彼は大切なものを守ると覚悟した目で、恥ずかしげもなく愛する人のためだと宣言した。それを聞いたシズはガゼフに返答する。

「……………戦士長……………雇用の必要はない……………元より倒さねば依頼が果たせない」

「……………感謝する!!」

彼は彼女の手を力強く握った。

六色聖典が一つ、陽光聖典。その隊長、ニグン・グリッド・ルーインは作戦の成功を確信していた。獲物は檻へと入り、包囲は完成した。あとは村人を逃がすための隙を作ろうと突撃してくる猛獣を数で圧殺するだけだ。腐った王国を生き永らえさせる善意の悪、ガゼフ・ストロノーフは『詰み』に入ったのだ。

彼は知らない。陽動部隊が蹴散らされたことを。彼は想像だにしない。この村に猛獣ガゼフより強い自動人形イレギュラーがいることを。

「汝らの信仰を神に捧げよ」

それが彼の最期の言葉になった。

「……………指揮官おほと思しき男の頭部狙撃成功……………敵部隊に混乱を確認……………指揮官と断定」

シズ・デルタは創造主より与えられし自らと同名の魔銃、『CZ2128』シーゼットニイチニハチを構え、初手で指揮系統の破壊を試みた。そしてそれは成功し、敵部隊は突然未知の攻撃で指揮官が死んだことにより激しく動揺している。どうやらこの部隊は均質な隊員を一人の指揮官で厳しく統率するタイプだったようだ。

「……………まさかこの距離で当てるとは」

ガゼフはその武器がすごいのか技術がすごいのかすら分からない常識外の超遠距離狙撃に舌を巻く。だが、これで敵の戦力は大幅に下がった。あとは突撃で決着をつけるべきだとガゼフは出撃しようとする。

しかし、他と同じ格好ではあるが明らかに周りに命令を下している隊員をシズは発見した。それを同じ手順で撃ち抜く。

「……………副指揮官おほと思しき男の頭部狙撃成功……………敵部隊の混乱、拡大……………副指揮官と断定」

その、戦術としては極めて正しいが全く容赦がない戦いに、ガゼフ率いる王国戦士団は揃って顔を引きつらせた。

そして冒頭へ至る。

彼女は周りの気ままずい空気にも気付かず、一つだけの翠玉エメラルドの瞳で敵を捉え続けた。

「……………敵部隊の撤退開始を確認……………追撃を提案」

「……………いや、それは不要だ。指揮官と副指揮官を殺された部隊は機能しない。彼らは祖国に帰る以外の選択肢はないだろう。デルタ殿のことを向こうは一切感知できていないはずだ。原因不明の攻撃で部隊が機能不全に陥るなど、まともな国家なら原因が分かるまで動けん」

「……………了解、戦闘を終了する」

その言葉を最後に彼女は魔銃を下ろし、戦闘体勢を解く。

指揮官と副指揮官はほぼ間違いなく遺体を持ち帰られ、蘇生されて戦線に復帰するだろう。だが、ガゼフはそれを阻はばむつもりはなかった。彼は王国を守りたいだけであつて、法国の恨みを買いたいわけではないのだ。

こうして、開拓村連続襲撃事件、およびガゼフ・ストロノーフ暗殺未遂事件は一度も王国戦士団の武器が振るわれることなく、終息したのだった。

続く。

シズちゃんかもふもふをもふもふする話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△ 通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女はかわいいものが大好きである。小さいもの、もふもふしたものを。そういったものを見つけたら持ち帰って何時間でも抱きしめたくなるほどに好きである。

そんな彼女は今、4メートルを超える巨大なもふもふをもふもふしていた。

ことの始まりは事件翌日の朝まで遡る。

村の復興を手伝っていたシズ・デルタは不思議に思っていた。森はモンスターの領域であり、よく生存競争に負けたモンスターが溢れ出てくると聞いた。しかしこの村は森のすぐ近くにもかかわらず塀どころか柵すらないのだ。それについて依頼者の恋人となった三つ編みの少女、エンリ・エモットに尋ねるところで答えられた。

「この村の北に広がる森は『森の賢王』という大魔獣の縄張りなんです」

「……………森の賢王？」

「はい、二百年の時を生きる、蛇の尾を持った白銀の四足獣だそうです。なんでも言葉を解し、魔法も使うとか。とても強いので、他のモンスターがよって来ないんです」

その言葉にシズはわずかに翠玉エメラルドの目を輝かせた。

「……………もふもふ?」

「えっ?……………まあ、毛が生えているのだから、もふもふはしているんじゃないでしょうか?」

「……………行く」

シズの心は渴いていた。最近、野盗団に囲まれたり冒険者殺しを倒したり帝国騎士を蹴散らしたり六色聖典を狙撃したりと、物騒なことが立て続けに起こっていたのだ。彼女は癒しを求めている。

「あの、行くってどちらへ?」

「……………森の賢王……………もふもふしに行く」

「ええ!」

エンリは驚いて声を上げるが、既にシズは背を向けて駆け出していた。もふもふを期待する彼女は気付かなかった。縄張りを守る大魔獣が友好的ではない可能性に。

もふもふを求める少女、シズ・デルタは森の中にいた。暗殺者アサシンや追跡者ストーカーの職業レベルクラスを持つ彼女は森の中でも迷うことはない。木に付けられた爪とぎの後を見つけ、それを元に森の賢王の居場所を探る。

そして見つけた。洞穴ほらあなの中でいびきをあげる、自らより巨大な白銀の毛玉を。

「……………見つけた」

「……………んう？」

彼女の言葉に反応したのか、巨大な魔獣がもそもそと動いて目を覚ました。そしてその大きな頭が持ち上げられ、薄暗い中でも目立つ赤ストロベリーレッド金の髪を視界に収めた。魔獣は声の主を見つけると驚いたように誰すいか何する。

「むむ!!そなたは誰でござるか!!某に気づかれずにここまで近付くなど只者ただものではござらぬな!」

森の賢王は明らかに警戒した様子でシズを見ている。それに対し彼女はあくまで友好的な態度を崩さない。

「……………シズ・デルタ……………もふもふしにきた」

「もふもふ?まさか某を愛でようというのでござるか?笑止!某は森の賢王!矮小な人間に愛でられる小動物ではござらん!」

「……………あなたは私より弱い」

シズは直感的に相手の強さを見抜き、自分より弱いと断定する。しかしその言葉に大魔獣は侮られたと判断し、目つきを鋭くして戦闘体勢に入った。

「……………ほう?言うではござらぬか。そなたが某よりも強いというなら……………証明して見せ

るでいやるー！」

そう言うのと森の賢王は立ち上がり、その威容を見せ付ける。大きい。全長4メートルはあり、体重は2トンを超えるだろう。

しかしシズは困った。彼女はもふもふを堪能しに来たのであって、敵対したり傷付いたりすることは望みではないのだ。不可知化して無理矢理触るという手もあるだろうが、もしも転げ回られて下敷きになつたりしたら堪らない。彼女の物理防御力はレベル20戦士職程度しかないのだから。

結局、彼女は不可知化して一時撤退することに決めた。もふもふ対象が敵対的であるという事実を考慮していなかった以上、新たに作戦を練る必要があるのだ。

「む!?消えた!?!」

彼女の姿を見失った魔獣はしばらく警戒し、聞き耳を立てたり匂いを嗅いだり、巣穴を尻尾で探つてみたりした。しかし結局、音も立てずに逃げ出したと判断し、再び眠りに就くのであった。

カルネ村に帰還後。癒しを求めた自動人形シズ・デルタは、オートマトン村の幼女ネム・エモットを抱えて歩いていた。彼女に癒されつつ森の賢王と仲良くなる方法を探るためである。ネムと森の賢王、かわいいもの同士で何か共通点があるかもしれないと思つたのだ。

「……………ネム……何をされたら嬉しい?」

「お姉ちゃんのお手伝いができたら嬉しい!」

「……………そう」

ネムはいい子だ。両親を亡くして辛いのは自分も同じなのに、姉のために幼い身で頑張ろうとしている。……とても、とてつもなく、恐ろしい発想だが……もし至高の御方々が一人残らずお隠れになられてしまったら、私は辛さに耐えて姉妹のために頑張れるだろうか?

シズがそのような身の毛もよだつ恐ろしいことを考えていると、前方から姉のエンリがやって来た。

「シズさん!」

「……………ただいま」

「どこまで行ってたんですか?ンフィーレアが探してましたよ?」

「……………森の賢王を見つけた。でも警戒されてもふもふできなかった」

「当たり前です!いくらシズさんが強くても、森の賢王は恐ろしい魔獣なんですからね!」

「……………諦めない」

「諦めてください……」

エンリは呆れたように言うとお昼ごはんの時間だから帰りましょう？」

「ネム、そろそろお昼ごはんの時間だから帰りましょう？」

「うん！ンファイ君とのお話終わった？」

「え、ええ！終わったわよ!？」

ネムにンファイレアとの『お話』について聞かれたエンリは顔を赤くして誤魔化すように答えた。昨日から二人は一緒にいることがやたらと多く、それを何となく察したネムは気を利かせてエモット家から離れていたのだ。

「……………教育上、ほどほどに」

「わ、分かっています!!」

致していることを控えるよう、シズから遠回しに言われたエンリは耳まで真っ赤にして叫んだのだった。

なお、彼女を責めるのは酷というものである。両親を失い、自身と妹も死にかけ、そこへ颯爽と現れた恋人に助けられたのだ。死別の悲しみから逃れるかのように初めて恋に熱中するのは、致し方ないことであった。

釣り橋効果などと言ってはいけない。ついでに恋人になった時系列も気にしてはいけない。恋心は論理的ではないのだ。

カルネ村での宿としているエモット家に戻ったシズは、森の賢王をもふもふするため
の作戦をンフィーレアに相談していた。錬金術師アルケミストならば何か役に立つアイテムなどを
持っていないかと考えたのだ。

「森の賢王、ですか」

「……………なんとか、もふもふしたい」

「力づくでは駄目なんですよね？」

「……………傷付けたくない」

その言葉でンフィーレアはシズが森の賢王に負けることはない判断し、協力するこ
とにした。

「でしたら、粘着剤がいいですね。相手をその場に拘束する薬剤です。ちようど念のた
めに持ってきている分があるので、お譲りしますよ」

「……………ありがとう」

彼女は礼を言うのと粘着剤の硝子瓶を受け取り、森の賢王に再びもふもふを挑むので
あった。

ちなみに、ベッドの割り当てはンフィーレアとエンリが夫婦のベッド、シズがエンリ
のベッドである。ネムがいるときに致さないだけ、彼らは冷静だろう。

シズが例の巣穴へ行くと、どうやら縄張りの巡回に出かけているらしく木の葉が敷き詰められた寝床があるだけだった。仕方なく外へ探しに出ようとすると――。

「誰でござるか?」

なんと、森の賢王が巣穴へと入ってきたのである。

「……………さつきぶり」

「その姿と声は、某を愛玩動物扱いしたうつけものでござるな!? 今度は逃がさんでござるよ!!」

大魔獣はそう言うと、立ち上がり、両前足を広げて二足歩行でじりじりと迫ってきた。巣穴の幅と高さは4メートルほど。不可知化して脇をすり抜けようとしてもギリギリばれる狭さだ。

「……………追い詰められた」

「ふっふっふ。状況がよく分かっているでござらんか。さあ! 覚悟するでござる!」

そして巣穴の主はそのまま近付いてくる――と思いきや、なんと尻尾を伸ばして突き出してきたのである。元々全長程度しかなかったはずのそれは、いまや20メートルはあろうかという長さがあった。

それに驚いたシズは慌てて避けながら、尻尾に粘着剤を振りかけた。そして何度も尻尾の攻撃を避けているうちに、ついにそれは巣穴の壁に張り付いてしまった。

「これは!?……おのれ人間!小細工とは卑怯でござる!」

「……………真劍勝負に卑怯はない」

「ふん!しかし、その妙な液体はもう無いようでござるなあ?」

事実だった。シズが持つてきていた硝子瓶にはもう一滴も粘着剤は残っていない。更に言うなら予備もない。そしてシズがいるのは巢穴の一番奥であり、逃げ場はない。

「尻尾は封じられたでござるが、もう終わりでござる!!」

森の賢王はそう言うのと、尻尾で攻撃しているうちに後一步で前足が当たるまで詰められた距離を更に詰めた。

「……………言ったはず。『追い詰められた』と」

「……………なにを——こ、これは!」

4メートルにも及ぶ巨体が前に進んだ時、それを支える両後足は『地面に撒いてあった粘着剤』に絡め取られていた。

「……………追い詰められたのはあなた。……あなたは必ずここへ帰ってくる。ならば罠を張っておくのは常識」

「おのれ最後まで小癩な!しかしもう前足が届く距離でござる!八つ裂きにされるがよいでござるよー!」

その言葉と同時に鋭い爪を持つ二本の前足が同時に振り下ろされる。だが、シズは避

けない。避けられるほどの広さはない。何より『避ける必要がない』。彼女は巨大なそれらを真つ向から両手で組み受けてみせた。

「なんと!？」

「……………至高の御方々に与えられた力で、あなたをもふもふする」

彼女はそう言う、その小さな体からは想像もできないほどの筋力で、巨大な二本の前足を力尽くで地面に押し付けた。自分がいる少し手前の、粘着剤が撒かれた地面に。

「ま、またねばねばでござるか!？」

「……………拘束トラップは回避できないほど広いのが鉄則。……………これで尻尾も足も封じられた……………諦めてもふもふされるべき」

彼女は降伏を促す。だが森の賢王は、二百年のときを生き言葉を解し、『魔法を使う』大魔獣は抵抗した。

「まだでござる!…《チャームスピーシーズ全種族魅了》!」

「……………!」

人間だけでなく全ての種族、異形種すらも魅了する極めて強力な魔法である。それを受けたシズは微動だにすることなく目の前のもふもふを見つめている。

「ふっふっふ。某に魅了されたでござるな?ならばこのねばねばを何とかするでござる」

「……………」

シズはその言葉に従い中和剤を取りに行こうともふもふの巨体をよじ登って巣穴を出ようとした。

「……………何をしているでござるか？」

と、見せかけて背中でもふもふを堪能していた。

「……………魔法は抵抗レジストした。魔法妨害の特殊ス技術キルを使おうと思ったけど、使うまでもなかった」

「そ、それでは勝負は!？」

「……………私の勝ち……………大人しくもふもふされるべき」

その言葉に森の賢王は悔しそうに唸った。

「ぐうううう!こうなればもはや負けを認めざるを得ないでござる!弱肉強食は自然界の定め!煮るなり焼くなり、好きにするが良いでござる!」

「……………もふもふするだけ」

それからシズは夕食の時間になるまで目一杯もふもふを堪能し、ここ数日の心の渴きを存分に癒したのであった。

続く。

シズちゃんがもふもふにしたことを男にする話

シーゼットニイチニハチ デルタ
 CZ2128・△。通称シズ・デルタ。それが彼女の名だ。

彼女はかわいいものが大好きである。しかし、かわいくないものは別に好きではない。ゆえに、かわいいものに対する反応をかわいくないものに行うなどまずありえない。

そんな彼女は今、もふもふにしたことをぼさぼさ頭で無精髭の男にしていた。ことの始まりは彼女がエ・ランテルへ戻るところまで遡る。

その話がされたのは、もふもふを堪能した翌日の朝だった。エモット家の食卓でエンリから切り出された話をシズは聞き返す。

「……………エ・ランテルへ、移住する？」

「はい。この村は多くの大人を失いましたし、お父さんとお母さんも亡くなりました。いま私とネムが生活できているのは生き残った大人たちに助けられているからです。……つまり、私達はこの村の負担になっっているんです。だから、せめて私達が大人になるまでの間だけでもエ・ランテルへ移って負担を減らしたいんです」

「……………カルネ村が好きだからこそ、離れるの？」

「はい…………」

そういうと彼女は寂しそうな、しかし納得している顔をした。シズはンファイレアに人形のように整った顔を向けて尋ねる。

「……………バレアレ薬品店に住むの？」

「はい。エンリとネムちゃんは薬草の知識もある程度ありますし、店の手伝いをしながら生活してもらおうと思っています」

「……………そうすれば、村は立ち直れる？」

「僕達が騎士を引き付けたおかげで、村の被害は再建できないほどではありません。ですが、それでもやはり親のいない子供が二人減るだけでも大分違うのです。人口の母数が少ないですから」

「……………そう」

シズはエンリとンファイレアの説明で一応の納得はした。だが、肝心のもう一人の意見聞いていない。

「……………ネム……………エ・ランテルへ来る？」

「うん……………ネムができるのはそれくらいだから」

「……………ネムは強い」

「そうなの？」

「……………うん……………心が強い」

やはりネムはいい子であり、それ以上に強い子だ。親を二人とも亡くして、その家からも離れるのは辛はずだ。至高の御方々が全員お隠れになられて、その上でナザリツクから離れる。そんなこと、自分には想像しただけで辛過ぎる。

結局、シズは三人の移住を助けることにした。彼女が手伝ったことにより、昼頃までには荷物の整理もお世話になった人たちへの挨拶も済んだ。そして本来ならば朝から夜までかかる道程みちのりを、シズは三人と荷物を乗せて四時間ほどで戻ったのだった。

なお、荷台に縛り付けられていた馬車馬は荷物の代わりに置いていかれた。きつとあの村で農耕馬として復興の一助となってくれよう。サンキュー馬。フォーエヴァー馬。君のことは次の馬を買うまで忘れない。

夕方。バレアレ薬品店に戻ったンフィーレアは祖母のリイジーにこつぴどく叱られていた。どうやら唯一の肉親である彼女にも行き先を伝えずに飛び出してきたらしい。彼女は冒険者組合に人探しの依頼を出しに行ったところ、そこで初めてカルネ村へ向かったと知ったそう。野盗団潰しのシズが護衛だと聞いたが、安心できるのか否か彼女にはいまいち分からなかった。ゆえにあと一日遅ければ自分も探しに行こうか、とや

きもきしていたそうだ。

「まったく、少しは後先というものを考えたらどうなんじゃ！この馬鹿孫が！」

「ご、ごめんお婆ちゃん！」

「……おぬしはもう少し冷静な子だと思つてたんじゃがな。結果として村を救えたから良かったものの、一歩間違えればおぬしも死んでいたんじゃよ？」

「分かつてるよ……。でもちゃんと強い冒険者も雇つたし、まったく考えなしに動いた訳じゃないんだよ。それに後一歩遅かったらエンリとネムちゃんと死んでたんだよ？」

「……まあ、それに関しては、おぬしの判断が正しかったと褒めてあげよう」

そう言うトリイジーは申し訳なきさそうに縮こまっているエンリとネムに向き直り、優しい声で二人を歓迎した。

「よく来たね、二人とも。……ご両親のことは残念じやつた。村のために住み慣れた家を離れるなんて、おぬしらは本当にいいこじや。村が復興するまでの間、ここを本当の家だと思つて住むといい」

「……！ありがとうございます!!」

「ありがとうございますお婆ちゃん！」

二人に頭を下げられた彼女は鷹揚に頷き、シズに目を向ける。腰が曲がった自分と同じくらいの背丈しかない小さな娘だ。本当にこの子が帝国の騎士を蹴散らしたのかと

疑わしく感じるが、全員が揃って言うのだから嘘ではないのだろうと納得する。

「おぬしが野盗団潰しのシズじやな？孫と村を救ってくれて感謝する」

「……………依頼……………達成」

「依頼だからにしても、こんな無茶な依頼を受けてくれて本当に感謝しておるよ。ンファイレア、報酬は渡したのかい？」

「あつ、そういえばいくらか決めてなかった……………」

「おぬしは本当に……………」

結局、ンファイレアは金貨300枚、蒸留酒6000本分の報酬を支払った。バルド・ロフーレ氏がシズに払った謝礼の6倍である。どこにでもあるような開拓村一つの価格としては高いが、ンファイレアにとってはエンリ一人の命だけでもお釣りが出るほど安いだろう。

この結果にシズも大満足である。3日間の時間と2発の銃弾を消費してしまったものの、ナザリック搜索時間が2000日も伸びたと考えればお釣りが出るところか大儲けだった。

しかしこの金額に当のエンリは驚愕のあまり腰が引けていた。カルネ村のお金を全て集めても銅貨3000枚がいいところだろう。金貨なら7枚半だ。にも関わらず恋人のンファイレアはその40倍もの額を個人で払ってみせたのである。

「ン、ンファイレーア、こんなに払って大丈夫なの……?」

「へ? ああ、大丈夫だよ? 貯蓄は金貨3万枚以上あるし」

「さん……………!?!」

エンリはあまりの額に気が遠くなった。金貨3万枚。どこの御貴族様かと彼女は思う。その認識はある意味正しい。金貨3万枚というのは貴族であるエ・ランテル都市長パナソレイ・グルーゼ・デイ・レッテンマイアの全財産に匹敵する金額だ。

だが注意しなければならないのは、バレアレ家にとって金貨3万枚はあくまで『貯蓄』でしかないということだ。諸々の財産を売り払えばその総額は金貨3万枚に達する。合計で金貨6万枚である。

贅沢が義務の貴族とポーションの探求以外に金を使わないバレアレ家では事情が違うかもしれない。だがそれでも、日給銀貨1枚とすれば一生どころか三千年以上は働かずに食っていける財産をこの家は所有しているのだ。

「あ、あはは……私、とんでもない玉の輿に乗っちゃったかも……」

「そ、そうかな?」

乾いた笑いしか出てこないエンリに照れるンファイレーア。一組の若いカップルの認識がすり合わされるには、もう少し時間がかかりそうだった。

翌朝。シズはこの街で知り合った人々に別れの挨拶を済ませた後、街道を西へ歩いてきた。この国で最も情報が集まるであろう王都へ向かうためである。彼女としては別に走っても良い。だがあの速度ですれ違ったら人が怪我をする、とンフィーレアに指摘されたのでゆっくりと歩いているのだ。シズは無闇に人を傷付けることを好まない、いい子なのである。

移動に時間がかかることに関しても、お弁当の蒸留酒を6000本以上アイテムボックスに詰めて準備万端だ。ちなみにこのせいでエ・ランテルの蒸留酒市場に投機を招き、一時、価格が十倍まで高騰した。売り抜けられなかった商人は大損害を受けたが、その中にバルド・ロフーレ氏はいなかったという。

それはともかく、雨合羽や就寝擬装用のテントも用意した。備えあれば憂いなし。彼女の本格的なナザリック探しの旅は順調であった。

しかし、好事魔多し。彼女の前に一人の男が立ち塞がる。その男はぼさぼさの髪に黴のような無精髭を生やした男だった。それだけ見ればまさに野盗であるが、その体は鋼のように引き締まり一見して戦いの中で鍛えられた戦士だと分かる風貌だ。

「よう。お前が野盗団潰しのシズだな？」

「……………誰？」

「俺はブレイン・アングラウス。お前が潰した死を撒く剣団の用心棒だ」

「……………復讐？」

「まあそんなところだ」

そういつて彼は腰に佩いた刀に手をかけ、重心を低く落として口上を述べた。

「——野盗団潰しシズ・デルタ、決闘を申し込む」

「……………嫌」

しかしシズはあっさりと拒絶する。彼女は至高の御方々の敵ならばいくらでも戦うが、それでもなければ戦うことを好まないのだ。これも全ては創造主与えられしカルマ値を守るためである。

「お前がどんなに嫌がろうと、こっちはお前と戦う理由があるんでな。付き合ってもら
うぞ」

「……………」

彼女は会話で切り抜けられるものではないと判断し、さっさと不可視化で横をすり抜けることにした。

だが、この判断が彼女に血を流させる。

目の前のシズ・デルタの姿が消える。街に潜伏している野盗団員からの、冒険者殺しを倒したときの情報通りだ。

(来たな)

彼はそう思い、オリジナル武技〈領域〉を発動する。これは本人から半径3メートルの範囲内で極限まで命中率と回避率を向上させる武技だ。そしてこの武技には『不可視の存在を発見できる』という能力もある。そして彼は幅6メートルほどの街道の中央に陣取り、そのときを待ち——放った。

その一撃は剣速が不可避の領域に達するオリジナル武技〈瞬間〉を、更に発展させた〈神閃〉によるものだ。この武技により放たれた剣速は、もはや不可知の領域に達する。〈領域〉と〈神閃〉、この二つからなる複合武技〈秘剣虎落笛^{もがりぶえ}〉。これは人体の急所、頸部^{けいぶ}を一刀両断し、吹き上がる血飛沫の音から名付けられた。

常勝無敗の自動人形^{オートマトン}、シズ・デルタの肌^{オートマトン}に刃が食い込み——血が舞った。

「おいおい、何の冗談だ?」

確実に^は刎^はねた。そう思ったにも関わらず領域を通じて感知できる人影には相変わらず首がついたままだ。ふと剣先を見れば僅かに血が付いている。どうやら『〈神閃〉を上回る速さで避けた』らしい。

ブレインはあまりの出鱈目さに嬉しくなった。こいつをここで倒せば俺はもつと上へ行ける。あの日、御前試合で初めて膝をついた宿敵ガゼフ・ストロノーフに勝てる。

そう思えば刀を握る手には力が籠り、顔には壮絶な笑みが浮かんでいた。

「……………痛い」

シズは相変わらずの無表情で痛みを口ににする。彼女の首を斬り飛ばすはずだった刃は、頬に浅く傷を付けるに留まっていた。

彼女は判断する。眼前の剣士は間違いなくこちらを感知していると。この直感的に自分より弱いと判断できるレベル帯の戦士職に、不可視化を看破するスキルは彼女が知る限りない。それに、この男の動きは『見えていないのに感知できていた』というものだった。

ならばあの冒険者殺しの女と同じ聴覚による感知か。そう思つて彼女は男へ問う。

「……………聞こえていた?」

「足音がか? いいや、別の原因さ」

「……………そう」

シズは即座に作戦を変更する。原因は分からないが不可視化は通じない。不可知化ならば通じるかもしれないが、それで次の斬撃を確実に避けられる保証はない。ならば横をすり抜けるのは止めるべきだ。そう考えた彼女は全速力で来た道を駆け出した。

「逃がすか!」

それを逃がすまいとブレインは追う。だがシズの素早さはレベル44戦士職に匹敵

する。彼が〈下級敏捷力増大〉^{レックス・ニクスタリテイ}のポジションを飲んでいるとは言え、彼女には追いつけない。

そして数分後。彼が彼女を取り逃がしてしまおうかと思ったとき、突然彼女が立ち止まって振り向く足音がした。

「……………チエックメイト」

その言葉と気配でブレインは即座に『それ』の正体を見抜く。

(遠隔攻撃か！)

彼も立ち止まり、刀を鞘に戻して居合いの体勢に入った。魔法なら避ける。矢玉なら刀で切り払う。命中率と回避率を極限まで高める〈領域〉を発動している彼にはそれが可能だった。

——それが、この世界の武器であれば。

「……………卑怯だろ、そんなん」

「……………真剣勝負に卑怯はない」

そして、冒頭へ至る。

奇しくも、かつて森の賢王に告げた言葉をシズは繰り返していた。

ブレインの右腕は撃ち抜かれ、骨が砕けているのかだらりと垂れ下がっている。彼は

〈領域〉によって飛翔した何かを感知できた。だが、反応はできなかつた。一体何が飛んできたのか。そもそも何の武器だったのか。彼には分からず仕舞いだった。

「……………通して欲しい」

「……………一つだけ教えてくれ。何で殺さなかつた？」

「……………殺す必要があるほど強くない」

「……………分かつた、通りな。……………用心棒は廃業だな」

彼はそれだけ言うのと道の脇により、不可視化したままの彼女の足音を聞き流した。
続く。